特257
391
353
203

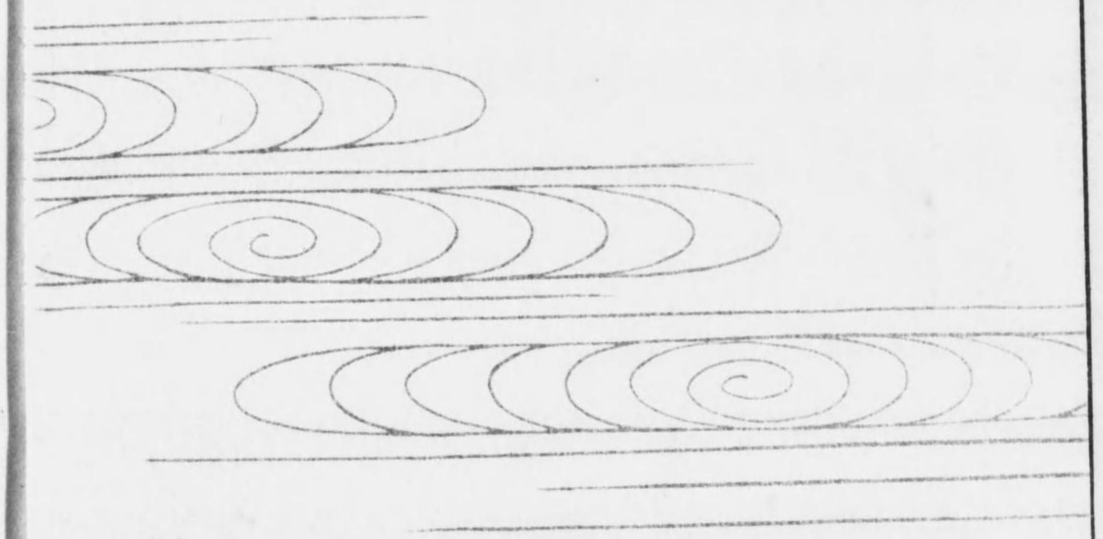
白
盛
佛
善
小

髮
久
原
知
鳥
鹽

内十九

始

明 257
391



白髭

觀阿彌清次作

曲柄　初能一番目　神祇物
季節　三月
稽古順　一級
所　近江國滋賀郡小松村鵜川白髭神社

梗概

當今に仕へ奉る臣下（ワキ）勅により近江國白髭明神に詣でけるに、湖上に舟を浮かべて釣を垂るゝ翁（シテ）あり。言葉をかけて明神の緣起を尋ぬれば、人壽百歳、わが國にては鷲嶺草茸不合尊の御宇、釋尊比叡山の麓に來り、この地の主といふ漁翁に、この山をわれに與へよ、佛法結界の地となすべしと宣ひしに、漁翁拒みけるを、藥師如來忽然として現れ、われこそこの所の主なれとて、釋尊に山の開闢佛法の弘通を勸め給ひき。その時の翁は卽ち白髭の神なりと敎ふ。官人、そのたゞ人ならぬをさとりて、如何なる人ぞと問へば、われ眞は白髭の神なりと告げて、社壇の內に入らせ給ひぬ。（中入）さる程に、朱の玉垣輝き渡りて、白髭明神（後シテ）御姿を現し、樂を奏して勅使を慰め給へば、天女（後ツレ）龍神（後ツレ）亦現れて、各々天燈龍燈を神前に捧ぐ。かくて夜も明方になれば、天女龍神は明神に御暇申し、天地に別れて飛び去りぬ。

謠ひ方

初能の神祇物の內にても、莊重なるものにて、殊にクセは長く、節の細きものにて、後は緩急多ければ、能く朱註を心得て謠ふべし。

△**シテ**　眞の一聲の出は、調子を抑へて、閑かに謠ひ出し、サシは稍さらりと運びを附け、下歌は寬たりと、上歌は伸んびりと、ワキとの掛合は落着いて「殊更こゝは」と互に詰め、サシは閑かに、上端は朗かに「今は何をか」と重んもりと「給ふべしと」ととくと閑めて謠ふ。

△**後シテ**　白垂鳥甲と云ふ、老たる神體にて、作り物の內より謠ひ出すなれば、どつしりと堂々と謠ひ出し「いざ〳〵さらば」と朗かに「面白や此舞樂」と調子抑へめに閑かに「かくて夜も早」と閑かに寬たりと謠ふ。

△**ツレ**　出はシテの調子に附き、二の句は調子を高めてさらりと、以下能くシテと調子を合せて謠ふべし。

△**ワキ**　初能の位を持ち、堂々と謠ひ出し、名乘は確かりと、

道行は朗かに、シテとの掛合はかゝつてさらりと「不思議なりとよ」と改めて確かりと「あらありがたの御事や」とたつぶりとさらりめに謠ふ。

△**地**　初同はどつしりと出で「我れは心も」と少しさらりめに、クリは改めて朗かに、サシは運び能く、クセは緩く長きものにて、歌古、花筐と共に三難曲とて古へは亂曲たりし物なれば、能く心得て謠ふべし、上端よりは段々運んで「夕べの雲も」とシテの位を受けて閑かに、中入前をとくと閑め「八少女の」と朗かにたつぶりと謠ひ出し、「神さび渡る」とずつと閑めて重く「不思議や」より乗つて、どつしりと「神樂催馬樂」と乗を外して閑かに「ありがたや」ととくと閑め「や」の廻し跡を呂に落し「面白や此舞樂」とシテの調子を受けて、稍さらりめに「湖水の面」より進んで「來現かや」とたつぶりと「天地の兩燈現れて」と進んで勢ひ能く乗つて「かくて夜も早」と閑めて寛たりと「天女は天路に」とさらりと「龍神は湖水の」と位進み「明け行く空も」と又閑めて朗かに謠ひ納むべし。

語　釋

君と神との道すぐに　―　新千載集第十卷、神祇歌に載す、津守國夏の歌、「怠たらず祈るも御代のためなれば君と神とに身はつかへつゝ」とあり。

花園の志賀　―　新古今集第二卷、春歌下に載す、攝政太政大臣藤原良經の歌、「明日よりは志賀の花園まれにだに誰かは訪はむ春の故郷」とあり。歌意は、古里となりたる志賀の花園も花咲く頃は多少訪ふ人もありたるが、明日よりは誰も訪ひ來る人もなかるべく、春の過ぎ去りたる跡の故郷との意。

眞野の入江　―　琵琶湖岸滋賀郡にあり。

鳰の浦　―　琵琶湖岸野州郡に邇保鄕ありしより、琵琶湖を鳰の海ともいへり。

風歸帆を送る　―　古詩に、「風送二歸帆一萬里程、江天渺々水光平、舟子解是明朝雨」とあるを引く。

あらしも匂ふ　―　夫木集に載す歌に、「吹きおろす嵐もにほふ山高み晴れぬ雲井や櫻なるらん」とあり

花さそふ比良の山風吹きにけり云々　―　新古今集第二卷、春歌下に載す、宮內卿の歌、詞書に、「五十首歌奉りし中に湖上歌を」と題して、「花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の跡見ゆるまで」とあり。歌意は、花を誘ひて吹き散らす比良の山風が甚だしく吹き、湖上を行く舟の過ぎたる跡が見ゆるまでに一面に美事な花が散り來るとの意。

天つ雁　―　千載集第一卷、春歌上に載す、源頼政の歌、「天つ空ひとつに見ゆる越の海の波を分けても歸る雁金」とあり。歌意は、臨玉閣序に云ふ、「秋水共長天一色又雁陣驚寒聲斷衡陽之浦」と云へる情より思ひ出でられしなるべし。

家々に傳はる所云々　―　古語拾遺に、「蓋聞上古之世未レ有二文字一、貴賤老少口々相傳、前言往行存而不レ忘」とあるを引く。

しばらく歸する所の云々　―　異同樣々なれども結局は一義に歸すとの意。

第九の減劫　―　劫とは佛教にて無限の時間をいふ。即ち劫とは梵語劫簸（Kalpa、カルパ）の略にて、大時分又分別時節と譯す。小中大の三別あり。人壽八萬四千歲より百歲を經る毎に壽一歲を減じ以て人壽十歲に至り、更に人壽十歲より百歲を經る毎に壽一歲を增し以て人壽八萬四千歲に至る。かく一增一減するを一小劫となし、この一小劫を二十倍するを一中劫となす。而して世界の成立より破壞に至るまで、即ち之を成住壞空の四類に分ちて說示せり。即ち天地開闢の最初に山川草木人類生類の未だ出來ざる間を空劫といふ。それより次第に物の成就しつゝ進みゆく間を成劫といふ。其後萬物こと〻〻く備はりて不足なき間を住劫といふ。それより又次第に減じ行くを壞劫といふ。此壞劫より本の空劫にかへることすべて九度目にあたる減劫の時を第九の減劫といふ。

人壽二萬歲の時　―　初劫の時の人の壽命なり。

八相成道　―　釋迦如來の出世に八種の相あり。一に都卒天より下り、二に托胎し、三に出胎し、四に出家し、五に降魔し、六に成佛し、七に說法し、八に涅槃に入るをいふ。これ釋尊の降誕して化を垂れ給ひし一代の相なり。

一葉の蓋に凝り固まつて　―　太平記に、「釋尊之を聞し召して、此波の流れ止まらんずるところ一つの國となりて、吾敎法弘通する靈地たるべしと思し召しければ、即ち此波の流れ行くに從ひて、遙に十萬里の蒼海を凌ぎ給ふ。此波忽に一葉の葦の海中に浮べるにぞ止まりにける。此葦の葉果して一の島となる。今の比叡山の麓、大宮權現跡を垂れ給ふ波止土濃なり。この故に波止まつて土濃なりとは書けるなるべし」とあり。

後五百歲の佛法　―　釋尊入滅の佛法即ち釋尊最後に說示せし法華經の利益を說く中にも、「後五百歲遠沾二妙道一」とあり。

間狂言

白髭明神の末社。

是は江州白髭の明神に仕へ申す末社の神にて候。去程に天地既に開けて後。第九の減劫人數二萬歲の時。迦葉佛西天に出世し給ふ時分。大聖釋尊は其の授記を得て。都卒天に住み給ひしが。八相成道の後遺敎流布の地、何れの所にかあるべきとて。此南贍部州を遍く飛行して御覽ずるに。漫々たる大海の上にして。一切衆生悉く有佛情。如來常住無有變易と立浪の音あり。釋迦佛此の斷を聞し召し。扨は此の浪の流れ止ら

んずる所一の國となり。わが教法弘通する靈地たるべしと思し召されし故。即ち彼の波の流れ行くに隨ひて、十萬里の蒼海を渡ぎ來り見給ふに。彼の波一葉の葦の浮めるに流れ止まり。其の葦こく固まり一つの國となる。今此の比叡山の麓大宮權現の波止土濃（はしとの）なり、是に依つて波止土濃とは、波止つて土濃やかとは書くなり。扨又人壽百歳の後悉達太子は。中天竺摩竭陀國淨飯王宮に誕生し給ひて。御年十九にて衣更着上の八日の夜半に。王宮を遁れ出で雪山に身を捨て。やがて萬事の正覺を遂げさせ給ひて。此の豊葦原中津國に來り見給ふに。其の頃は鶺鴒草葺不合尊の御代なれば。人未だ佛法の名字をだにも聞かず。然れども此國は大日偏照の本國として。佛法繁昌の靈地たるべければ。何れの所にか應化利生の門を開かんと。此處彼處尋ね給ふ折節。則ち此の比叡山の麓志賀の浦の邊に。老人の釣を垂れて居たりしを御覽じて。汝此所の主ならば當山を我に得させよ。やがて佛法繁昌の靈地と成すべしとあるを。其時翁答へて曰く。吾人壽五百歳の昔より。此の湖水の七度迄蘆原と變ぜしを正しく見るに。此度此處に佛閣を建て。佛法繁昌となすならば。漁（すなど）する事なるまじきと思し召し。釋尊早く去つて他國に御求めあれと。荒々しくも宣ひたるは忝くも白髭の大明神にて御座候。是は先づ當社の目出度き子細さて又當公に御仕へ申さるゝ臣下。唯今御參詣と申す間參りて見申さうずる。（此後せりふ常の如し）

裝束附（白髭）		
ワキ	勅使	大臣烏帽子　赤上頭掛　着附厚板 白大口　袷狩衣　繡紋腰帯　扇
ワキツレ	從者二人	大臣烏帽子　萠黄上頭掛　着附厚板 白大口　赤袷狩衣　繡紋腰帯　扇
ツレ	漁夫男	直面　襟赤 白大口又ハ着流　着附無地熨斗目 繡紋腰帯　縹水衣　扇
前シテ	漁翁	面、朝倉尉又ハ笑尉　尉髮　襟樺 着附小格子　白大口又ハ着流 茶絽水衣　緞子腰帯　扇
後シテ	白髭ノ神	面、鼻瘤惡尉又ハ茗荷惡尉　白垂 烏甲　白鉢巻　襟淺黄　着附厚板 半切　袷狩衣　繡紋腰帯　神扇
後ツレ	天女（略ナシ）	面、連面　天冠　黒垂 襟赤　着附　摺箔　鉢巻 縫腰帯　天女扇　長絹　緋大口
後ツレ	龍神（略ナシ）	面、黒髭　鉢巻　赤頭龍鼓　襟紺 着附段厚板　半切　法被 繡紋腰帯　打杖
作物		一疊臺（燈明臺）小宮　釣棹二
小道具		燈明二

白髭

ワキ勅使上ワキツレ二人眞ノ次第ツヨク拍子ニ合

朗カニ

君と神との道直に。君と神との道直に治まる國ぞ久しき

素謡座席順

ワシツ　キテレ

ワキ詞

そもそもこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州白髭の明神は。霊神にて御座ん。君この程不思議の御霊夢の御告ましますに

より。急ぎ姿を詣申せとの宣旨を
蒙り。唯今白髭の明神に。勅使に
参詣仕りれ（三人道行上言ココノヘ九重の空ものどけ
き春の色。空ものどけき春の色。
霞む行方は。花園の志賀の山越
うち過ぎて。眞野の入江の道す
がら。鳥の浦風さえかへり。立ち寄る

（シテ男二人上真ノセイ）
（地謡三人合ハス）
釣の營みいつまでか。蘆も波間に。
明け暮れん（月ツレ二ノ句）掉さすなる海士ふ
舟（二人）渡り兼ねたる。浮世かな（中上）風
帰帆を送る萬里の程。江天渺々と
して水光平らかなり（二人）舟子は解く

○小謡

これ明朝の雨。面白や頃しも今は
春の空。霞の衣綾びて。峯白妙に。
咲く花の。嵐も匂ふ。日影かな（折切）
上歌（中ノ神カ）
賤しき海士の心まで春こそのどけ（柏子三合）
かりけれ（折切）○花誘ふ。比良の山風吹（朝カニ吹キシ）
きにけり。（折切）比良の山風吹きにけり。
漕ぎ行く舟の跡見ゆる。鳥の浦わ（元天）
も遥々と。霞み渡りて天つ雁。（元夏）帰る（折切）
越路の山までも。眺めに續く。景色（元シ）
かな眺めに續く景色かな。（ワキ詞カリメニ）いかに
これなる翁。汝はこの浦の者か
シテ（確カリメ）「さんぶこの浦の漁夫にてゆが。朝な
朝な沖に出でて釣を垂れゆまづ御
姿を見奉れば。このあたりにては

見則れ申さぬ御事なりもし都
よりの使者詣にて居はいか「ワキウケテ」げに
よく見てあるものかなこれは當
今に仕へ奉る臣下なるが君この
程不思議の夢霊夢の御告まし
ますによりて勅使に参詣申してい
「シテ囚カニ」ありがたや君とてただかほどま

で敬ひ給へ御神の。威光の程
こそありがたけれ 「シテ二人上ヲ引サフリニ」賤しき海
士のこの身までも。直なる市代に。
「ワキカル上」近江の湖の。深き恵みを頼むなり
「げに誰とても君を仰ぎ。神を敬へ
心あらばなどか恵みにあづからざ
「シテ雑カリ」らん 「シテ歌コトサラ」殊更こゝは 「ワキウケテ」所から 「上歌同ミダカニサフリノ」○瑞垣の

年も經にけり白髭の。年も經にけり白髭の。神の誓ひは今とても。變らざりけり。げにありがたや頼もしや。われは心も波小舟。釣の翁の身ながらも。安く樂むこの時に。生まれあふ身はありがたやまれあふ身はありがたや。それこの國

○サシ曲獨吟

の起り家々に傳はる所。おのおの別にしてその說まちまちなりといへども。暫く記する所の義によらば。天地既に分つて後。第九の減劫人壽二萬歲の時。○迦葉世尊西天に出世し給ふ時。大聖釋尊その授記を得て。都率天に住し給ひしが。われ八相

成道の後。遺教流布の地いづれの所にかあるべきとて　同　この南瞻部洲を普く飛行して御覽じける に。漫々とある大海の上に。一切衆生悉有佛性如來。常住無有變易の波の聲。一葉の蘆に凝り固まつて。一つの島となる。今の大宮

權現の。波止土濃なり　切拍子合　その後人壽。百歳の時。悉達と生まれ給ひて。八十年の春の頃。頭北面西右脇臥跋提の波と消え給ひ。されども佛は。常住不滅法界の。妙體なれば昔。蘆の葉の島となりし中つ國を御覽ずるに時は鸚草。葺不合の。尊の

中代なれば佛法の名字を人知らず。こゝに比叡山の麓さゝ波や志賀の浦の邊に。釣を垂るゝ老翁あり。釋尊かれに向つて。翁もし。この地の主たらばこの山をわれに與へよ。佛法結界の地となすべしと宣へば。翁答へて申すやう。われ人壽六千歳の始めより。この山の主として。この湖の七度まで。蘆原になりしをも。まさに見たりし翁なり。但しこの地。結界となるならば。釣する所失せぬべしと深く惜しみ申せば。釋尊力なく。今は寂光土に。歸らんと。給へば時に東方より淨瑠

同

瑠璃世界の主藥師。忽然と出で給ひて善きかなや。釋尊この地に佛法を弘め。給はん事よ。われ壽二萬歳の昔より。この所の主たれど。老翁未だわれを知らず。なんぞこの山を。惜しみ申すべきはや。開闢し給へわれもこの山の主となつて。共に後五百歳の。佛法を守るべしと。

二神まゐ出でまゐらせ給ひ

固く誓ひ給ひて。二佛東西に去り給ひ。その時の翁も今の白髭の神とかや。「不思議なりとよかはどまで。妙なる神秘を語る翁のその名は如何に覺束な「今は何をか包むべき。その古も釣を垂れ

し翁なるが。勅使を慰め申さんとて。唯今ここに来りたり。殊更今宵は天燈龍燈。神前に来現の時節なれば。暫く待たせ給へ

静 同 抱子三合

べしと 抱子三合 夕べの雲も立ち騒ぎ。夕べの雲も立ち騒ぎ。汀に落ちくる風の音老の波も寄りくる。鈞の翁と見えつるが。われ白髭の神ぞとて玉の。扉を推し開き社壇に入らせ給ひけり社壇に入らせ給ひけり 中入来序間

地上 朗カ 出端 抱子二合六

八少女の。返す袂の色々に。宜禰が鼓も聲澄みて。神さび渡れる折からかな

後シテ上 重ニシモリ 白髭神

神は人の敬ふによつて威を増す。まてやこれは勅の使。仰ぎて

もなほ餘りありり（上歌同）不思議や社壇の
内よりも。不思議や社壇の内よりも。
誠に妙なる御聲を出だし。扉もおの
づから。朱の玉垣かゝやき渡る。白髭
の。神の御姿。現れたり（ワキ上ゲ）あらあり
がたの御事や。かゝる奇特に逢て事
もたゞこれ君の御蔭ぞと。感涙袖

をうるほせり（朗カニ）いざいざさらば夜も
すがら。舞樂の曲を奏しつ。勅使を
慰め申さんと（上歌同）神樂催馬樂とり
どりに。神樂催馬樂とりどりに。糸竹
の役々秘曲を盡し。拍子を揃へて夜遊
の舞樂はありがたや（樂上刻返）面白やこの
舞樂（同中ウケテ確カニ）面白やこの舞樂の。鼓はおのづ

「上元又ハ神ヲ招ク合ヲ」から。磯打つ波の聲。松風は琴を調め。心耳を澄ます折からに。天つ空の雲居かゝやきわたり。湖水の面鳴動するは。天燈龍燈の來現かや

同上（元ヲカケサラリ）

出端（天女出）
是當（龍神出）
舞上ル合ヲ

天地の兩燈あらはれて。天地の兩燈あらはれて。神前に供ふる御燈の光。山河草木かゝやきわたり。日夜の勝

○獨吟

おのおの明神に御幣をしし

「上元又ハ神ヲ招ク合ヲ」劣見えざりけり。働○「かくて夜もはや明け方の同ウケ確カリ かくて夜もはや明け方になれば。おのおの明神に御暇申し。歸れば明神も市聲をあげて。善哉善哉と。感じ給へば天女は天路に立ち歸れば。龍神は湖水の上に翔つて。波を返し。雲を穿ちて天地に

別れて飛び去り行けば。明け行く空
も。白髮の。明け行く空も白髮の
神風。治まる御代とぞ。なりにける。

盛久

十郎元雅作

梗概

主馬判官盛久（シテ）は源氏に捕はれて鎌倉に送らるゝこととなりしが、將に京都を立ち出でんとする時、警護の武士土屋三郎（ワキ）に乞ひて、日頃信仰せる清水觀音の佛前に奧を立たせて、最後の祈願をなし、やがて近江路より美濃尾張と國々を越えて、鎌倉に下り着きぬ。

かくていよ〳〵刑戮の時も近づきたる折、盛久は心靜かに「或遭王難苦、臨刑欲壽終、念彼觀音力、刀尋段々壞」と觀音經の讀誦を終へ、左に金泥の御經、右に念珠を持ち、由比濱に引かれて、首の座に直りぬ。太刀取（ワキツレ）則ち後より太刀を振り上ぐれば、御經の光に眼塞がり、取り落したる太刀は二つに折れて段々となる。頼朝これを聞きて召し出だし、この曉われと等しく、盛久が清水觀音の靈夢を蒙りたる次第を知り、痛く佛力に感じて、盛久の罪を免じ、酒宴を催して舞を望めり。盛久乃ち立ちて男舞を舞ひたる後、長座を憚りて席を辭したりき。

曲柄　四、五番目（略二番目）
季節　三月
稽古順　一級
所　前、京都　後、相模國鎌倉

謡ひ方

現在物にして、盛久は文武二道に達し、死を決して裕々迫らず、觀世音を信じ、後世の冥福を祈りしなれば、道行は、沈み勝の内に稍花やかなる心を持ち、中段は雄壯沈着に下段は快潤にして莊重に變化多く節も細く、謡ひ易からざる曲なり。

△**シテ**　出は謡ひ出しつゝ幕を離るなれば、何事なく閑かに出で、ワキとの掛合はしとやかに「南無や大慈大悲」と少し間を取り、調子を控へ目に出だし「あら御名殘惜しや」と抑へてゆるめ「いつか又」と改めて花やかならぬ程に、寛たりと「音に立てぬも」と伸んびりと「見渡せば」と又改めて閑かにしつとりと「我なまじひに」と氣を變へ抑へめに出で、ロンギは浮かぬ樣にしつとりと「夢中に道あつて」と獨言の述懷なれば、調子を抑へて閑かに、節も細かく和柔吟と變る處を態とならぬ樣に「かくてながらへ」と氣を變へ「天晴とう斬られればやと」と殊勝に、ワキとの掛合も詞を抑へめに落

着いて「ありがたや大慈大悲は」と經文を讀むなれば、調子高くならぬ樣に、愼ましく「或遭王難苦」と强めて確かりと「けによく御聽聞」と受けて確かりと「種々諸惡趣」と又讀經なれば、殊勝に愼ましく「あら不思議や」と夢より覺たる心地なれば、調子を內へとりてしつぽりと「待設けたる」と前と氣を變へはつきりと「命も今を」と稍さらりと「立ち出づる」とはつきりと、次のワキとの掛合は、稍朗らかに運んで「盛久やがて座に直り」かゝつて確かりと「盛久も思ひの外」と氣を變へ閑かに、以下ワキとの掛合は互にかゝつて手强くさらりと「何をか隱し申すべき」と穩やかに、クリは改めて朗らかにさらりと、サシはうつきりとさらりと、上端は朗らかに、ロンギは寬たりと「せん方もなき」と稍ゆるめ「種は千代ぞと」改めてたつぷりと「ありがたしありがたし」と受けて朗らかに「長居は恐れあり」と勇ましく謠ふ。

△**ワキ**　シテに同情する武士なれば、荒々しからず、凡て確かりと、始めの掛合は受けて「如何に面々」と氣を變へはつきりと「あら痛はしや」と閑かに、次のシテとの掛合には、同情を持つ心にて「又衆怨悉退散と」と確かりとさらりめに、シテとの連吟の經文は、シテの調子に合はせ「既に八聲の鳥啼いて」と前と異り改めて確かりさらりと「武士前後を」より手强くさらりと、以下段々と詰めて「急ぎけり」と手强く地へ渡し「扨由比の汀に」と改めてさらりと「いやいや何をか」とかゝつてすかりと、以下段々と詰め「如何に盛久」と氣を掛けはつきりと、ロンギ過の「いかに盛久」とかゝつて確かりと謠ふ。

△**ワキツレ太刀取**　輕くさらりと謠ふ。

△**地**　「歸る春なき」と引立てゝ朗かに「瀧津心を」とたつぷりと「又いつかはと」と浮立ぬ樣に、下歌は氣を變へて閑かに、上歌は朗かに伸んびりと、ロンギは改めて引立つる內に、淋しき心あるべし「この文の如くは」と緩やかに「昔在靈山の」と調子を抑へて閑かに低く「觀世音」とゆるめ「三世の利益」と元へ戻し「夢路を出づる」と地次第は閑かにどつしりと「經文新たに」とはつきりと位を進めて「御經や」と閑め「やがてこの由」と氣を變へさら〳〵と進んで、クリは朗かに、シテの調子を受け、サシはさらりと、クセは健實に運んで、輕くならぬ樣に、上端は引立てゝ朗かに、ロンギは改めてさらりと引立て「花を受けたる」とたつぷりと「酒宴半ばの」、以下さらりと晴れ〴〵と謠ひ納むべし。

能の異式（小書）

恐之舞（かしこみ）　男舞のおろしが省かれ、拍子を踏まず、蓋し高貴の前を畏むなり。

小書に非れども(夢中の出)とて前の道行を略し「夢中に道あつて」より謠ひ出すこともあり。

語　釋

盛久　―　平盛久の事正史に見えず。平家物語長門本に主馬入道盛國の末子八郎左衛門盛久、平氏亡びし後隱れしも下女の密訴により捕へられしと記せり

土屋殿　―　賴朝の家臣にて、土屋三郎宗遠といふ。土肥實平の弟なり。

さしも草　―　新古今集第二十八卷、釋敎歌に載す、清水觀音の詠歌、「なほ賴めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは」とあり。歌意は、如何に憂くつらくありとても、我此世の中にあらん間は決して失望するなかれとの意で、非常に嘆く人を慰撫したる歌なり。

書羽山　―　清水觀音のある山の名。卽ち東山の內。

見渡せば柳櫻をこきまぜて云々　―　古今集第一卷、春歌上に載す、素性法師の歌、詞書に「花ざかりに京を見やりてよめる」として、「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける」とあり。歌意は、かく見渡すと柳の靑い色と櫻の白い色を混じて、此京の景色は恰も春の錦といふ物であるとの意。劉後村の鶯梭の詩に、「擲レ柳遷レ喬甚有レ情、交々時作ニ弄レ機聲一、洛陽三月春如レ錦、多少工夫織得成」の句あり。

跡白河を　―　白河は京都の地名。

松坂　―　粟田口より日の岡に至る坂路。

唯今關東に下りなば　―　逢坂の關より東を指して關東といふ。又箱根を限りて東を阪東といへり。阪東八ケ國と云ふときは武藏、相模、安房、上總、下總、常陸、上野、下野をさす。

四の宮　―　四の宮河原は安祥寺村の東をいふ。源平盛衰記に、「粟田口兩葉山四宮河原を打過ぎて」云々とあり。河原今はなし。諸羽明神社の邊をいふ。

四の辻　―　十禪寺の辻をいふか、夫木集に載す歌に、「あけ渡る四の宮河原霧晴れて遠方人の數ぞ見えける」とあり。四宮は所名也。昔此所に仁明帝第四の皇子人康親王の山莊ありて、其舊跡なるが故に四宮と稱す。

是やこの云々　―　後撰集第十五卷、雜歌一に載す、蟬丸の歌、「これやこの行くも歸るもわかれては知るもしらぬも逢坂の關」とあるを引く。

鏡山　―　古今集第十七卷、雜歌上に載す、讀人不知の歌、「かゞみ山いざ立ちよりて見て行かん年經ぬる身は老いやしぬると」とあり。近江國守山と武佐の間にあり。昔天智天皇と大友の皇子と戰ひの時、鏡の大君討死す。卽ち此所に葬る故に鏡山といふと日本紀にあり。

老會の森　―　滋賀縣近江國蒲生郡老蘇村大字東老蘇と西老蘇の間にあり。續古今集に載す歌に、「立ちよれば袖こそぬる

れ年へぬる身さへ老曾の杜の下露」とあり。

鳴海潟 ― 尾張國熱田の東南一里にあり。此より三河國八橋に至る五里入江あり。鳴海潟と稱す。古昔は滿潮のときは路行く人上野を通る。詞花集に載す、藤原爲仲の歌に、「古郷にかはらざりけり鈴虫の鳴海の野邊の夕暮の聲」とあり。

高師山 ― 三河國二川と白須賀との間にあり。三河遠江の國境。

汐見坂 ― 高師山の內。下りはつれば白須賀にて、南は遠州洋、風景よき故此名あり。

橋本 ― 白須賀より一里にて、橋本の東に濱名湖あり。現今の新居町。

濱名の橋 ― 橋本の東濱名湖にある橋。

命なりけり云々 ― 新古今集第十卷、羈旅歌に載す、西行法師の歌、詞書に、「あづまの方にまかりけるによみ侍りける」として、「年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけりさよの中山」とあり。歌意は、先年此小夜の中山を越え行きしとき、此くの如く年老いて再び此山を越ゆべしとは思はざりしに、今此處を越ゆるは人の知るべからざる運命の故といふ意。

かはる淵瀬の大井川云々 ― 丙辰紀行に、「大井川は駿河と遠江との境なり。飛鳥川ならねど、霖雨降れば淵瀬かはるこ

とたびく〳〵なれば、東の方の岸を流れて、島田の驛川原の中にあることもあり、西の方に流れて金谷の山に添ふ事もあり」とあり。

宇津の山 ― 駿河國岡部と鞠子の間の山。

清見潟 ― 駿河國庵原郡にあり。

三保の入海 ― 清見潟の海をいふ。

田子の浦にうち出でゝ見れば云々 ― 新古今集第六卷、冬歌に載す、赤人の歌、「田子の浦にうち出でゝみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ」とあり。此歌は萬葉集第三卷に、「田兒之浦從、打出而見者、眞白衣、不盡能高嶺爾、雪者零家留」と。これを和譯すれば、「たごのうらゆ、うちでゝみれば、ましろにぞ、ふじのたかねに、ゆきはふりける」といふなり。即ち駿河國清見が崎より東へ行けば、薩埵坂といふ山路に昔の街道あり。そこより向ひの伊豆の出麓までの海を田子の浦といふ。共入海越しに富士山見ゆる。さればかく詠みしなり。歌意は富士山に雪がま白に降りて誠に面白き景色なりとの感動の意。

箱根山 ― 伊豆國と相模國との境にある山名。

星月夜はや鎌倉に云々 ― 相州鎌倉極樂寺の切通へ登る坂の下に星月夜の井とて存せり。

夢中に道あつて塵埃を隔つ ― 夢中に行く路は塵埃も厭はぬ

との事をいふ。

百年の榮華は塵中の夢云々 ― 百年の榮華もたゞ塵の世の夢と消す、一寸の光陰をもいたづらに思はず砂中の金を堀り出せしが如しとの意。白居易の詩句に、「百年富貴夢中事、一旦榮花風前塵」とあり。

塵埃の悲願 ― 觀世音菩薩の大慈悲心をいふ。

定業亦能轉云々 ― 定業とは宿世善惡の業作をいふ。亦能轉菩薩の直道とは、苦樂の果を感ずべく決定せられたる宿作の決定樂は、如何なる方法を以てするも、これを改轉すること難しと雖も、若し衆生の懺悔力の深厚なるときは、此定業を轉じて、苦果を免れしめんと、一切菩薩が誓ふといふ事なり。

無緣の慈悲 ― 慈悲に三種あり。一に衆生緣、二に法緣、三に無緣。即ち無緣は、衆生にも法界にも緣なきものに施す慈悲なり。語を換へて言へば無緣は中道の慈悲なり。中道とは寂而常照の理なるが故に、無緣にして法界を緣するを無緣の慈悲といふ。何れの途にも緣なき者に施などを無緣の慈悲と心得るは大なる誤りなり。摩訶止觀第六に曰く、「無緣慈悲者卽如來慈悲、此慈悲與實相同體、不取衆生相故非愛見、不取涅槃相故非空寂、非空寂故非法緣慈悲、非愛見故非衆生緣、無二邊相故名無緣」と說示してあり。引導とは、一定の方向に誘引指導すること。大智度論に、「大愛道比丘尼涅槃す。佛自ら前にあり、香爐を擎げて引導す」とあるは此意なり。

今生の利益もし缺けば云々 ― 法華經第八卷、普門品第二十五の偈文にて、此世にて佛を供養せずして其儘果てなば、誰を賴みて極樂善所に到るべきとのこと。

二世の願望若し空しくば云々 ― 二世は現在と未來、即ち今生後生の衆生の願空しくば、佛の誓約も皆いつはりにてあらんといふことなり。如意輪經に、「若我誓願大悲中一人不成二世願我墮虛妄罪過中不還本覺捨大悲難度衆生能度相現悲愛衆生慈一子」と說示してあり。

或遭王難苦臨刑欲壽終、念彼觀音力刀尋段々壞 ― 法華經普門品の偈文なり。即ち王命に背ける難に遭ひて、既に刑罰の場に臨んで身命終らんと欲するとき、彼觀音を一心に念ぜば害せんとする刀段々に折れて其難を免るべしとの意。

又衆怨悉退散と云々 ― これも法華經普門品の偈文。如何なる場合に際會しても觀音の力を念ぜば、衆の怨敵が悉く退散するとの意。

種々諸惡趣地獄鬼畜生、生老病死苦以漸悉令滅 ― これも法華經普門品の偈文、即ち地獄餓鬼畜生種々の惡趣の苦或は人間の四苦、皆この觀音の力を賴み奉らば漸々に悉く滅すとの意。

三惡道 ― 地獄、餓鬼、畜生の三つをいふ。

昔在靈山云々 ― 昔靈山に在りて法華と名づく、今西方に在りて阿彌陀と名づくといひて、釋迦も彌陀も觀音も同體同種なり。されば娑婆に觀世音現れて利益を示すとの意。故に南岳大師は、「昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、濁世末代名觀音、三世利益同一體」と說き、畢竟妙法蓮華經は觀世音菩薩の密號なり。

八聲の鷄 ― 八聲の鷄とは庭鳥をいふ。袖中抄に、「鷄をば八聲の鳥といふは八聲鳴く故也、常に八聲鳴くにはあらず、曉には、はつとり、なかとり、しばとりと鳴く」とあり。

金泥の御經 ― 紺紙に金字を以て書きし經文。

おもひの玉 ― 念珠のこと。

牢より籠の輿にのせ ― 盛久を牢より引出し籠輿にのせる。

由比の汀 ― 鎌倉時代の仕置場。今鎌倉に盛久首の座とて古址あり。

御前 ― 頼朝の前。

初夜 ― 夜の八時。

後夜 ― 曉の四時。

一點 ― 晝夜を六つに分ちて其一と時を五つに割りたる其第一刻をいふ。

八旬 ― 八十の齡。

香染 ― 黃に黑を帶びたる色。

六窓いまだ明けざるに ― 六窓は六つの窓をいふ。是を六根に譬ふるなり。然るを上の諷詞によりて六窓を夜の明六つにいひかけたり。

鳩の杖 ― 鳩の形を杖の頭に刻み作れるをいふ。鳩は食するに噎ざるものなり。故に老人の杖の頭に鳩の形を刻みて是を造るなり。周禮羅氏が註曰、「鳩性不レ噎食レ之助レ氣」と。又後漢書禮義志曰、「仲秋之月縣道皆安レ戶比二民年始七十者一授レ之以二玉杖一飾二之糜粥一八十九十禮レ加賜二玉杖長尺端一以二鳩鳥一爲レ飾鳩者不レ噎之鳥也欲二老人不レ噎一矣」とあり。

小松殿 ― 平重盛。

主馬 ― 東宮の御馬を奉行する官。

唐土が原 ― 相摸國片瀨川の東の原。

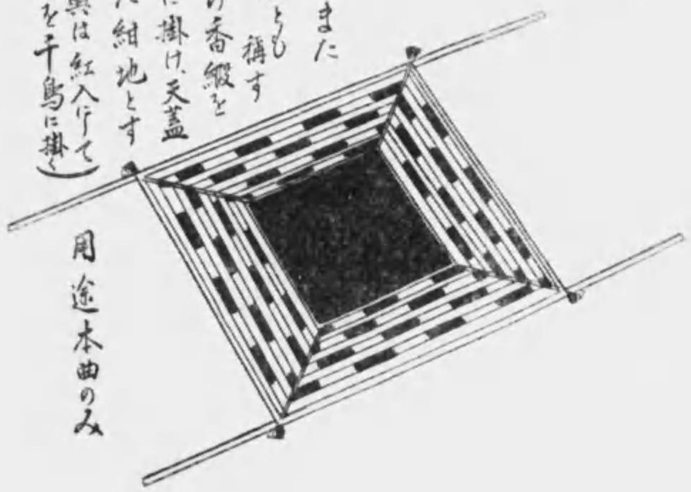
鶴の岡の松の葉の ― 鎌倉鶴岡は雲井が嶺といふ。社壇南向也。鎌倉町字雪の下に鎭座す。「本社は人皇七十代後冷泉院御宇、伊豫守源朝臣頼義奉二勅諚一征二伐安部貞任一之時有二丹祈之旨一、康平六年八月潛勸二請石淸水一建二瑞籬於當國由比郷八人皇七十二代白河院永保元年二月陸奥守源朝臣義家加二修復一、（中略）其後治承四年十月十二日源頼朝崇二祖宗一奉二遷小松郷一」と。「松の葉の散り失せずして正木のかづら」は古今集の序詞なり。

間狂言

ワキの從者。

（ワキ、シカケ）御前に候（ワキ、シカケ）長つて候。さても〳〵奇特なる事かな。さる程に主馬の判官盛久。此中當所へ下り給ふが。則ち土屋殿の預りにて樣々痛はり申さるゝ處に。大事の咎人の事にてあれば急ぎ誅せよとの仰せ出ださるゝに付き、頼み申す人も是非に及ばず由比の汀へ御伴ひある處に。程なく太刀取後に廻り振上ぐると存じたれば二つに折れて。盛久は命を助かり給ふ。さてもこれは奇特なる事と不審に存ずれば。主馬の判官はこの年月淸水の觀世音を信じ給ひ。毎日觀音經を讀誦あるが。疑ひもなき御利生にて御座あらうずる。誠に昔が今に至るまで。かやうの奇體なる御事を某などは聞きも及ばず候。この由君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ御前へ御參りあれとの御使なれば、先あれへ參りこの通りを申さうする。いかに盛久へ申す。土屋殿の承りにて烏帽子直垂を着し。急ぎ御前へ御參りあれとの御諚にて候。

輿



籠輿また牢輿とも稱す
無紅の香緞を並行に掛け、天蓋もまた紺地とす
（常の輿は紅入りて香緞を千鳥に掛く）

用途本曲のみ

作物	裝束附（盛久）	
籠輿	シテ 平盛久	直面 襟淺黄 着附無紅厚板 白大口 掛絡 縫腰帯 經 水晶數珠 物着梨子打烏帽子 白鉢巻 掛直垂 小刀 繡紋腰帯 神扇
	ワキ 土屋三郎	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 込大口 上下直垂 小刀 扇
	ワキツレ 輿舁二人	着附厚板 白大口 繡紋腰帯 扇
	ワキツレ 太刀取	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 繡紋腰帯 小刀 太刀

素謡座席順

シテ盛久詞（肉カニ確カリ）

ワキツレ

ワキ土屋（カケテ確カニ）

シテ（確カリト肉カニ）

シテサシ上ヨワク（肉カニ）

盛久

いかに土屋殿に申すべき事のゐ

唯今鎌倉に下り

何事にていぞ

なばこれが限りなるべし。清水の

方へ輿を立てて給はりゐへ

それ

こそ易き御事。いかに面々。東山の

方へ輿を立てられゐへ

南無や

大慈大悲の観世音さへも草。
さへも畏き誓ひの末。一稱一念な
ほ頼みありぬ。まして多年値遇の
ほ結縁空しからんや。あら御名残
惜しや。いつかは清水寺の花盛り
地 帰る春なきぞ。名残かな　シテ 音に立てぬ
も音羽山　地 瀧つこころを。人知らじ

シテサシ上 見渡せば柳櫻をこき交ぜて。錦と
見ゆる故郷の空　同 いつかはと思ひ
出の。限りなるべき東路に。思ひ立
つこそ名残なれ　シテ上 われなまじひに
弓馬の家に生まれ。世上に隠れなき
身とて　同 思はざる外の旅行の道。剛
の東に赴けば。跡白河を。行く波の。

いつ歸るべき。旅ならん（切）ては誰を
か松坂や四の宮河原四つの辻（切）
上歌（鎧カ）
これやこの行くも歸るも別れては。
行くも歸るも別れては。知るも知ら
ぬも。逢坂の關守も今のわれをば
よも留めじ。勢田の長橋うち渡り。
立ち寄る影は鏡山。さのみ年經ぬ

身なれども。衰へは老蘇の森を過ぐ
るや美濃尾張。熱田の浦の夕汐の
道をば波に隱されて。廻れば野邊
に鳴海潟又八橋や高師山又八橋や
（ロンギ地上シテ）
高師山（切）汐見坂橋本の。濱名の
橋をうち渡り（地）旅衣。かくきて見
んと思ひきや。命なりけり小夜の

中山はこれかとよ　地上「変る淵瀬の
大井川。過ぎ行く波も宇津の山
シテ「越えても関に清見潟　同　三保の入海
田子の浦うち出でて見れば真白
なる。雪の富士の嶺箱根山。なほ明
け行くや星月夜はや鎌倉に。着き
にけりはや鎌倉に着きにけり

シテサシ上ツヨク「夢中に道あつて塵埃を隔つ。げに
やそとても知らざりし。山を越え
水を渡つて。この関東に着きぬ。百
年の榮花は塵中の夢。一寸の光陰
は沙裏の金。げにや故郷は雲居の
よそ。千代もと契りし友人も。変る世
なれやわれひとり。鎌倉山の雲霞

げにかゝる身の習ひかや。かくてながらへ諸人に面をさらさんよりあつぱれ疾う斬らればやと思ひい

ワキ詞「あら痛はしや盛久の獨言を仰せいひ。いかに申しいひ。土屋が參りていい

シテ「土屋殿とゞや此方へ御入りいへ

ワキ「御下向の由を披露申していへば。急ぎ誅し申せとの御事にていい

シテ「唯今も獨言に申し〳〵如くかくてながらへ諸人に面をさらさんよりも。あつぱれ疾う斬らればやとの念願。さてはや叶ひていよ。さて最期は唯今にていいか

ワキ「いや彼最期はこの暁か。然らずは明夜かと仰せ出だされていい

シテ「さて

は暫くの時刻にていよ。さてもこの程土屋殿の御芳志。申すもなかなか愚かなり。又亡からん跡一遍の念佛をも御廻向に預からば。二世までの御芳志たるべし。（詞気ヲカヘ）われこの年月清水の観世音を信じ。毎日かの御經を解る事なし。さりながらけふ

は未だ讀誦申さずいま程に。御暇を賜はりいへ。かの御經を讀誦申したくいへ。（ワキウケテサガリノ）「それこそありがたういへ。土屋もこれにて聽聞申さうずるにていへ。（ワキ同カヘステリ）「ありがたやお慈悲は薩埵の悲願。定業亦能轉（カルヰ中ヲ引ノバ）は菩薩の直道とかや。願はくは無縁の慈悲

を垂れ。われを引導し給へ。今生の利益もし缺けば。後生善所をも誰か賴まん。二世の願望もし空しくば。大聖の誓約豈虛妄にあらずや。

或遭王難苦臨刑欲壽終。念彼觀音力刀尋段々壞（口半詞ユツタリ）「ありがたやこの御經を聽聞申せば。御命も賴もしう

こそれへ（シテ雅カリ）「げにより〻聽聞ひものかな。この文といつぱたとひ人王難の災に逢ふとい〻とも。その劔段々に折れ（口半カル上ツヨク）「又衆怨悉退散といふ文は。射る矢もその身に立つまじければ（シテ陽カ雅カ）「げに賴もしやさりながら。全く命のために（口半二人和ウケ中ノ）「この文を誦するにあらず（シテ雅カ）種々

○小謡

諸惡趣地獄鬼畜生。生老病死苦
以漸悉令滅（歌同中利カ確カリ　拍子合）　この文の如くば。諸々
の惡趣をも三惡道は遁るべしやあ
りがたしと夕露の。命は惜しまずたゞ
後生こそは悲しけれ（上歌同　拍子二重ノモト）　○昔在靈山の。
序名は法華一佛。今西方の主又婆
婆示現し給ひて我等が為の觀世

音。三世の利益同じくは。かく刑戮に
近き身の。誓ひにいかで洩るべきや。
盛久が終の道よも闇からじ賴も
しや。（詞シテ）あらゝ不思議や。少し睡眠の
内にあらたなる靈夢を蒙りて
ひはいかに。あらありがたやば
ツヨク（ヒルダカサラリワ　拍子合ハス）「既に八聲の鳥鳴いて。最朝の時節

唯今なり。はやはや御出でいそぐべしとよ

シテ詞「待ち設けたる事なれば。左には金泥

の御經。右には念ひの珠の緒の。命

も今を限りなれば。これぞこの世を

門出の庭に。足よわよわと立ち出づる

ワキカル上ツヨク「武士前後を圍みつ。これぞ別れの鳥

の聲。シテ「鐘も聞うる東雲に「籠より

籠の輿に乗せ「シテ「由比の汀に「ワキ「急ぎ

「次第同「シテ「けり。夢路を出づる曙や。夢路を出

づる曙や。後の世の門出なるらん「ワキカル上「さて

由比の汀に着きぬかば。座敷を定め

敷皮敷かせ。早々直らせ給へべし

シテ詞カリ「盛久やがて座に直り。清水の方は

其方ぞと。西に向ひて觀音の御名を

唱へて待ちければ

ワキツレ上ヲ 太刀取 「太刀取後にまはりつゝ。稱念の聲の下よりも。太刀振り上ゲれば。こはいかに。御錘の光眼に塞がり。取り落したる太刀を見れば。二つに折れて段々となる。こはそも如何なる事やらん。」

シテ詞ユツタリ カル上ヲ 気ラクケ 「盛久も思ひの外なれば。たゞ茫然とあきれ居たり。」

ワキ カル上ヲ 「いやいや何をか疑ふべき。この程讀誦の御錘の文。」

シテ カツテ 「臨刑欲壽終。」

ワキ シテタウジテ 「念彼觀音力。」

同上 「刀尋段々壞の錘文あらたに曇りなき劔段々に折れにけり。」

拍子三合 「未世にてはなかりけり。あらありがたの御錘や。やがてこの由聞し召し。急ぎ法前に參れとの

御使度々に重なれば。召に隨ひ盛久は。鎌倉殿に參りけり 物著 「いかに盛久ぢ前にてい。君この暁不思議なる霊夢の御告あり。盛久も若し夢や見けると 「何をか隱し申すべき。の御事にてい 今夜不思議の霊夢を蒙りてい

○サシ曲獨吟
○切迄囃子

ワキ「さらばその霊夢のやうをぢ前にて眞直に申し上げられいへ 「畏つていい 「それ不敢心覺の御誓ひ。今以て始めならず 過去久遠の大悲の光いづく不到の所ならん。然るにわれこの光陰を頼み 日夜朝暮に懈らず。かの御經を修讀せしに。敢り

分きこの時節刑戮に近き身を思つて。片時懈る事もなく「シテ」初夜より後夜の。一點まで「同」蕭然として坐したりしに六窓いまだ明けざるに。耿然たる天虛明なる内に恩はずも。八旬にたけ給ひぬと見えさせ給ふ老僧の。香染の袈裟を懸け

□能ノ時ハ打切事モアリ

水晶の數珠を爪ぐり。鳴の杖にすがりつつ。妙聞たづしき声にてわれは洛陽東山の。清水のあたりより汝が為に來りたり。もとより犬慈犬悲の。願などか空からん。たゞ。一音なりとても。われを念ずる時節の王難の災は遁るべし「シテ上」況んや

汝年月　同　多年の誠を抽んで。發心
人に越えたり。心安く思ふべしわれ
汝が命に代るべしと宣ひて夢は即
ち覺めにけり。盛久貴く思ひて
歡喜の心限りなし。「頼朝これを
聞し召し。この暁の夢想も同じ
告ぞとあらたなる信感は限り

なし　シテ上「その時盛久は。夢の覺めた
る心地して。感涙をとめかねば前を
罷り立ちければ　地上「いかに盛久暫し
とて。御簾を上げて召されれば
シテ「せん方もなき盛久が　同中「命は千秋
萬歲の春を祝ふぞと。御盃を下さ
るれば　地上「種は千代ぞと菊の酒

地上「花を受けたる。袂かな」「いかに盛久。盛久は平家譜代の侍武器の達者。殊には乱舞堪能の由聞し召し及ばれたり。一年小松殿北山にて茸狩の遊路の席酒宴に於て。主馬の盛久一曲一奏の事。閑東までも隠れなし。殊更これは悦びの折なればたゞ

さてとの席所望なり急いで仕りゐへ

○「ありがたしありがたし得がたきは時。シテ

去り難きは貴命なり。盛久かゝる

時節に逢て事。世以てたゝしある

べからず。治まり靡く時なれや。天

四海の内のみか。人の國まで日の本の。

唐土が原もこのところ

男舞 弁上

○仕舞　○キリ地上

「酒宴半ばの春の興。酒宴半ばの春の興。曇らぬ日影のどかにて。君を祝ふ千秋の鶴が岡の。松の葉の散り。失せずして眞祈のかづら「長居は恐れあり」長居は恐れありと罷り申し侍り。退出ける盛久が。心の中ぞゆしき心の中ぞゆしき。

佛原

世阿彌元清作

曲柄　三番目　雜物
季節　九月
稽古順　一級
所　加賀國石川郡吉野谷村上木滑

梗概

都方の僧（ワキ）白山禪定を思ひ立ちて加賀國佛の原に到り、とある草堂に立ち寄りて一夜を明かさんとせしに、一人の女性（シテ）出で來りて回向を乞ふ。僧諾ひて亡者の名を問へば、昔平清盛の時、妓王佛御前とて舞曲めでたき白拍子あり。清盛始めは妓王を寵愛しけるに、佛御前を見てよりこれに心を移し、妓王は追ひ出だされて嵯峨の奥に隱れ住みしを、佛御前われも同じく髪を下して妓王を訪れし程に、妓王、今までは御身を恨みしも、今こそ眞の佛なれと感涙を流ししが、その後佛御前は故郷なるこの所に歸りて空しくなれりと語る。僧、さても今弔ふ御身は如何なる人ぞと糺せば、その身の佛なることをほのめかして、草堂の内に入りぬ。僧乃ちこの原に假寢して夜もすがら讀經すれば、佛御前（後シテ）夢中に現れ出で、舞を奏し、この世は夢幻の一睡の内ぞと諦ひ捨てゝ消え失せぬ。

謠ひ方

聲物の内にも、優美にして淋しき曲なり、美人の聞えある佛御前の世の無情を悟りて樣を變へしを物語るなれば、美しくしつとりしたる内に、靜寂の心を忘るべからず。

△**シテ**　里女なれば、呼掛は伸んびりと閑かに謠ひ出し、以下ワキとの掛合はしとやかに「さなきだに」と抑へめに「さらば其名を」と閑かにはつきりと、以下順次に運んで「悉皆成佛と」とワキとの連吟は抑へめに確かりと、サシは優美に上端は伸んびりと、ロンギは調子高くならぬ樣にしつとりと「草堂の」と閑めて謠ふ。

△**後シテ**　一聲の出は美しく伸々と「遠寺の鐘も」と心持して内へとり「恥かしながら」と抑へめに「佛事をなすや」より詰めて「佛の舞の」と改めて寛たりと「獨りなほ」とワカは引立てゝ朗かに、次の地との掛合は乘つて、花やかならざる樣に「嵐吹く雲水の」と乘りを外して、閑かに抑へて謠ふ。

△**ワキ**　下り僧なれば、品好く閑かに、次第を謠ひ、名乘は

伸んびりと、道行は長閑に「急候程に」と氣を變へ、しつとりと「不思議やな」とかゝつて、以下シテとの掛合は、シテを助けて「不思議や扨は」とかゝつて、はつきりと、以下運んで漸次に詰め、シテとの連吟はシテの調子に從ひ「なほなほ佛御前の」とさらりと、待謠は閑かに浮き立たぬ樣に「不思議やな」とかゝつてさらりと、以下掛合は運んで「此原の」と詰めて謠ふ、素謠の節はワキツレを略し一人にて謠ふ。

△**地**　初同は調子を控へめにしつとりと出で、クリは稍引立てゝ伸んびりと、サシはすらりと、クセも閑かにしつぽりと淋しみを附け、粘らぬ樣に、上端は引立てる氣味にて、花やかならぬ程に、ロンギは改めて朗かに「主は佛よと」閑かに納めて、中入前をとくと閑め、後の「草木も靡く」と引立てゝ美しく「おの〳〵歸る」と乘つて、大鼓の頭に附きて出で優美に、以下シテとの掛合は寛たりと、去れどシテよりはさらりめに、段々と運んで「嵐吹く雲水の」と乘を外して、シテの調子を受けてしつとりと「一歩」と心持し「擧げざる先をこそ」と閑かに、凡て此切は花やかならぬ樣に幽玄の心にて謠ふべし。

語　釋

佛原　―　平淸盛に寵を得たる佛御前の幽靈現はれて、昔語りをなす。その古鄕の土地の名なり。

白山　―　石川縣加賀國能美郡と、岐阜縣飛彈國大野郡とに跨がる山名。

越の白山　―　越は加賀、能登、越中、越後地方の總稱なり。古今集第八卷、離別歌に載す、藤原兼輔の歌、「君がゆく越の白山知らねども雪のまに〳〵にあとは尋ねん」とあり。歌意は、君のゆかれる北國の白山あたりは、私の不知案内の道であるが雪の澤山降る處と聞けば、君の踏んで行かれた其雪の足跡のまゝにお跡を尋ねて私も參りますとの意。

天照す神の柞の云々　―　白山權現は天照大神の御母、伊弉冊尊を祭れる社なればかくいふ。柞は色濃く紅葉する木の名。

佛の原　―　加賀國石川郡吉野谷村上木滑邊を云ふ。一說に能美郡中海村原とも云ふ。

五障　―　法華經第五卷、提婆達多品第十二卷に、「女人身、猶有二五障一、一者不レ得レ作二梵天王一、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛者」とあるをいふ。

三從　―　儀禮に、「婦人有二三從之義一、無二專一之道一、故未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從二長子一」とあり。

涼しき道　―　淨土をいふ。地獄は火中の世界、淨土は水邊の都との意。

一佛成道觀見法界、草木國土悉皆成佛　―　一佛成道の悟りの身を以て、佛法界を見る時は、非常の草木山川も成佛せざるものなしとの意。

野もせにすだく　―　野原一面に鳴くをいふ。新撰朗詠集、蟲に載す歌に、「かしがまし野もせにすだく虫の音や我だに物をいはでこそ思へ」とあり。

聲佛事　―　讀經のこと。

佛刀自　―　刀自は女の尊稱なり。

溫顏　―　にこやかなる容貌をいふ。

西山　―　京都の西山のこと。卽ち嵯峨野の地。今祇王寺に佛御前の舊跡あり。

岩代の松　―　和歌山縣紀伊國日高郡にあり。萬葉集第二卷、挽歌、有間皇子の歌、「いはしろのはまゝつが枝を引きむすびまさきくあらばまたかへりみん」とあるを引く。

とことはに　―　長くの意。

輪廻の姿　―　心地觀經に、「有情輪廻生二六道一、猶如二車輪無二始終一、或爲二父母一、壽二男女一、生々世々有レ思」と示せり。

ひとりなほ佛の御名を云々　―　古歌なるべし。誓願寺を參照すべし。

前佛は過ぎぬ　―　釋迦如來の時は過ぎ去りたりとの事。

後佛はいまだ　―　彌勒佛は未だ出世せずとのこと。

夢の中間　―　迷を導く佛なき今の時代との意。

天に浮べる云々　―　古今集漢文の序に、「浮レ天之波起二於之一滴之露一」とあるを引く。

問狂言

所の者。

是は此あたりに住む者にて候。今日はもの淋しき折からなれば。草堂のあたりへ立ち越え。心を慰めばやと存ずる。いや是なるお僧はいづくより御參りなされたるぞ（此間せりふ常の通り）さる程に。太政の入道淸盛は。日本を思ひのまゝに治め給ふにより。不思議の事のみ色々し給ふその頃。都に遊女數多あるうちに。閑と申す白拍子の娘に祇王祇女とて姉妹のありしが。姉の祇王をば平相國の召し置かれ。朝暮御寵愛限りなき折から。三年になりてこの加賀の國の白拍子に。名をば佛と申す人のありて。美女の譽れを取り舞も上手なりしが。或時西八條へ參り申されけるを。太政の入道は聞し召されて。如何に遊女なりとも祇王があらん所へは。神とも云へ佛とも云へ叶ふまじきぞ。とう〳〵出でよと宣ふ折節。祇王淸盛に申されける樣は。たとへ舞を御覽なく歌を聞し召さずとも。御對面ばかりなりともあれかしと申すに付き。召し歸されて今樣を謠ひ。並に舞を舞はせて御覽あれば。見聞く人々耳目を驚かし給ふ。殊に眉目像聲よく。舞も上手なれば。相國佛御前に御心を移されけれど。祇王の思はれん所も恥かしく思し召し。此度は御暇給へと申すを。さやうにあれがあ

るを嫉むに於ては。祇王に出でよと御便りありし程に。なからん跡の忘れ形見とや思はれけん。一首の歌に。萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草。いづれか秋にあはで果つべきと。この歌を年月住み馴れし障子に書き付け。すご〳〵と出で。世の中を恨み二十一にて髪下されければ。妹の祇女も母の閉も尼になり。嵯峨の奥に柴の庵を給ひ。一心不亂に念佛申す處に。佛御前は次の年の秋の時分。祇王の一間所に書きたる歌を見て。いづれか秋にあはで果つべきとはげにもと思ひ。浮き世を厭はん爲に忍び出で。樣を變へ嵯峨野の方へ尋ね行き。祇王に逢ふてわが身の科なき由を語り。四人一所に居て淨土を願はれしが。佛御前は此國の人なる故。後には古里に歸りこれにて果てられたると申す。さあるに依てこの草堂の主は佛にてある由承る。先我等の存じたるはかくの如くにて候(ソウロウ)是は奇特なる事仰せらるゝ物かな。この草堂の主は佛にてあると申せば。貴きお僧の此原中へ御出であり。殊に是へ立ち寄り給ふにより。佛御前に假に見みえ給ひたると存ずる間。末は急ぎの旅なりとも。今宵は此處に御逗留あり。終夜ありがたき御法を遊ばし。其後いづくへも御通りあれかしと存ずる。

無地熨斗目

小袖紫朱の一種にて、地色は素、茶、緑等もあれど花色地を專として用ひ、使遂長だ汎し、本曲ワキの如き佗びたる僧、及びワキツレの僧

また佐高からざる尉の役竹生島、鵜飼、忠度、野守等また安達原、善知鳥、藤戸阿濃の前後、鷹、舍利、鐘馗雷電の前シテ、其他ツレ男等の着附とす、なほ國栖、飛雲、通小町、大會等の被きにも用ふ

裝束附（佛原）			
ワキ	旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 緞子腰帶　扇　數珠	
ワキツレ	從者二人	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 緞子腰帶　扇　數珠	
前シテ	里女	面、若女　鬘　鬘帶　襟白二 着附摺箔　唐織着流　鬘扇	
後シテ	佛御前	面、若女　鬘　鬘帶　前折烏帽子 襟白二　着附摺箔　緋大口　又ハ紫 長絹　胴箔腰帶　鬘扇	

素謡座席順

佛原

ワキ僧上ー裕タリ
ワキツレ二人
次第
ヨワク拍子三合

よそは猶の秋深きよそは猶の秋
深き雲の白山尋ねん

ワキ詞

これは都方より出でたる僧にてゝ。われ未だ白山禪定せずゝ程にこの秋思ひ立ち白山禪定と志してゝ遥々と越の白山知らざりし。越の白山知らざり

し。其方の雲も天照らす。神の祈の
もみぢ葉の。誓ひの色もいや高き峯
峯早く廻り来て冬詣するぞありが
たき冬詣するぞありがたき　「急ぎい
ざこれはやく加賀の國佛の原とや
らん申しい。日の暮れていざこれな
る草堂に立ち寄り。一夜を明かさばや

と思ひい　シテ女　「なうなうあれなる御僧。
何とてその草堂には御泊りいぞ
「不思議やな道もなく里もなき方
より。女性一人来りつゝわれに言葉を
かけ給へは。如何なる人にてまゝますぞ
シテ　「これはこの佛の原に住む女にていい。時も
こそあれ今宵〳〵もこの草堂に

御泊りこそ。ありがたき機縁にてましませば。は思ふ日に當れり。御經を讀み佛事をなしてたび給へ。さなきだに五障三從のこの身なれば。迷ひの雲も晴れ難き。心の水の濁りを澄まして。涼きき道に引導し給へ。

ワキ詞「御經を讀み佛事をなせと承る。それこそ出家の望みなれ。さて。さて。弔ひ申すべき。亡者は誰にてまますぞ。

シテ詞「さらばその名をあらはすべし。右佛法前と申しし。白拍子は。この國より出でし人なり。都に上り舞女の誉れ世に勝れ給ひしが。後には故郷なればとてこの國に歸り。終にこゝにて

空くなる。跡のしるもこの草
堂の露と消えにしその跡なり

ワキカル上来

「不思議やさては古のその名に聞え
し佛成前の。なき跡までも名を
とめて

シテ詞

「佛の原とい名所も。昔を
とむる名殘なれば

ワキカル上来

「今弔ふも疑
ひなき。成佛の縁あるその人の

シテ

「名も賴もしや一佛成道

ワキ

「觀見

法界

シテ

「草木國土

ワキ二人

悉皆成佛と

聞く時は

上歌同

○佛の原の草木まで。佛の原
の草木まで。皆成佛は疑はず。あり
がたや折からの。野もせにすだく虫の
音までも聲佛事をやなしぬらん。
山風も夜嵐も。聲澄み渡るこの

○小謡

原の草木も心あるやらん草木も心あるやらん。（ワキ詞）なほなほ佛前の御事委しく御物語りゝへ（クリ地）昔平相國の御時。妓王妓女佛刀自とて。温顔（打掛）舞曲花めきて世上に名を得し遊女ありしに。（サシ）始めは妓王を召し置かれて。遊舞の寵愛甚しくして色香を

○サシ曲獨吟

飾る玉衣の。袖の白露起臥の。御簾の内を立ち去らで。さながら宮女の如くなりしに（シテ）思はざるに折を得て（同）佛前を召されしより。御心うつりていつしかに妓王は出だされまゐらせて（シテ）世を秋風の音更けて。（同）涙の雨もをやみもせず（拍子合）げにや

思ふ事。かなはねばこそ浮世なれ。
われはもとより優色の。花一時の盛
りなれば散るを何と恨みんや。嵐は吹
けども松はもとより常盤なり。いつ
歎き。いつ驚かん浮世ぞと。思へばかく
る折節の。来るこそ教へなれ。かも
迷ひを照らすなる彌陀の御國も

其方ぞと　同　頼みをかけて西山や。浮
世の嵯峨の奥深き草の庵に隠れ
家の隠れて住むと思ひしに。思ひの
外なる佛前の。様を変へ来りたり。
こはそもさるにてもかく捨つる身と
なりぬれど。なほも御身の恨めしさの
執心は残るにそもかくる心持つ人かや。

今こそ眞の。佛にてまゝませとて妓
王は手を合はせ感涙を流すばかり
なり。（ロギ地上）「昔語はさておきぬさて今
跡を吊ひ給へ。御身如何なる人や
らん（シテ上）「われは誰とか岩代の。松の葉
結ぶ露の身の。行方を何と問ひ給
ふ（地上）「行方いづくと白雪の。跡を見よと

はこの原の（シテ）「草の庵はこゝなれや
（地）「露の身を置く草堂の（同）主は佛よと
いひ捨てゝ立ち去る影は草衣。尾花
が袖の露分け（問心）草堂の内に入りに
けり草堂の内に入りにけり（中入間）
（キリ天上歌）「松風寒きこの原の。松風寒きこの
原の。草の假寢のとことはに南法を

後シテ女上ニ
一声
「あらありがたの御經やな。はや明方に
もなるやらん。遠寺の鐘も幽かに響
き。月落ちかゝる山邊の。嵐烈しき
假寢の床に。夢ばし覺まし給へなよ
不思議やな佛の原の草枕に優女の

ワキカル上ニ

影の見え給へはいかさま聞きつる
佛成前の。幽靈にてぞまします
らん
シテ詞柳ヘテ
「恥かしながら古の。佛とはれ
し名を便りにて。輪廻の姿も歌舞
をなす
ワキカル上ニ
「極樂世界の。声法の聲
シテ
「佛事をなすや
ワキ
「この原の
シテ
「佛の舞の。
妙なる袖
地
「草木も靡く氣色かな

シテワカ上 ひとりなほ。佛の市名を尋ね見ん

地上 おのおの歸る。法の場人の場人の

シテ中 法の教へも。幾程の世ぞや

地上 前佛は

○仕舞

過ぎぬ

シテ 後佛は未だなり

地上 夢の

中間は

シテ この世の内ぞや

地上 鐘も

響き

シテ中 鳥も音を鳴く

地上 夜半の

内なる夢幻の。睡の内ぞ。佛もある

同 まづ。まして人間も

シテ中 嵐吹く雲水の

嵐吹く雲水の。天に浮かめる波の。

滴の露の始めをば。何とか返す舞

の袖一歩。拳げざる先をこそ。佛の

舞とはいへべけれと謡ひ捨てて失せ

にけりや謡ひ捨てて失せにけり。

善知鳥

世阿彌元清作

曲柄　四番目（略二番目）
季節　四月
稽古順　三級
所　前、越中國中新川郡立山
　　後、陸奥國外ヶ濱

梗概

諸國一見の僧（ワキ）越中國立山に登りて、地獄の如き恐ろしき嶮路を踏み、やがて山を下りて陸奥の方へ赴かんとせしに、一人の老人（シテ）出で來り、陸奥に下り給はば、外の濱にて去年の秋身まかりたる獵師の妻子を尋ね、簑笠を手向けくれよと傳へ給へといふ。僧、易き事なれども、證據なくては承引あるまじと答ふれば、老人その着たる麻衣の袖を解きて、これをしるしにとさし出だし、行方知れず立ち去りぬ。（中入）外の濱にては、獵師の妻（ツレ）一子千代童（子方）亡き人の上を忍びて悲しめるところに、かの旅僧尋ね來りて亡者の詞を傳ふ。即ち簑笠を手向けて讀經回向すれば、獵師の亡靈（後シテ）現れ出で、わが子の髪をかき撫でんとすれど、横障の雲に隔てらるゝを悲しみ、今地獄道に墮ちて、娑婆にて殺し、諸鳥、殊に親子の愛深き善知鳥やすかたに苦しめるゝ樣を示し、僧の助けを求めて消え失せたり。

謠ひ方

阿漕と並んで、澁き難曲とせらる、此の曲は獵師が生前に殺したる、諸鳥に責められ、苦患を受くる曲なれば、全體に於て寂しく、華美にならぬ樣に、居着かぬ樣に謠ふ事肝要なり。

△**シテ**　獵師の靈とて、すさみたる老人なれば品位を持たず賤しき心にて、ワキの終りの文句に掛けて氣を込め、さらりの心にて呼び掛け、ワキとの掛合は落着いて「木曾の」と上音の抑へたる心持にて出で「麻衣」のはりを内へ取り「袖を解きて」とゆるめて澁く謠ふ。

△**後シテ**　出は調子を抑へめに淋しく、古歌を口すさむなれば、其心持して閑かに「一見卒都婆」と改めて稍確かにしつとりと「哀れやけに古は」と抑へて閑かに、段々運びを附け「何しに殺しけん」と抑へめに心持し「あらなつかしやと」とかゝつて强めに、はつきりと地へ渡し、サシは調子控へめに、上端は花やかならぬ樣に「うたう」とかけて大きく「うたうは却つて」と調子を抑へて閑かに謠ふ。

△**ツレ**　母なれば常のツレの如く餘りさら〳〵と謠はず、謠ひ出しは花やかならぬ樣に「母が思ひを」とゆるめ、ワキとの掛合はさらりと「これは夢かや」とすらりと「さりながら」と氣を變へはつきりと「今取り出だし」と互に詰め「あれはとも」とかゝつて、調子高めにさらりと謠ふ。

△**ワキ**　着流し旅僧なれば位を持たず、さらりと名乘り「又よき序」「急候程に」と氣を變へ「扨も我れ此立山に」と淋しき心持にて「慙愧の心」より拍子に合ふなれば少し閑かに、シテとの掛合は、シテに位を讓り確かりと、ツレとの掛合は落着いて「よく見れば」とはつきりと「南無幽靈」と改めて殊勝に謠ふ。

△**地**　初同はしつとりと受け、花やかならぬ樣に中入前を閑めて「疑も」とすらりと附け「なつかしの形見や」とゆるめ「やがて其まゝ弔ひの」と氣を變へ「衆罪如霜路」とさらりと受け「御僧」とゆるめ「所は陸奥の」と稍引立てゝ「苫屋形」とゆるめ「圍ふとすれど」とさらりと「横障の」と稍手强くかゝつてさらりと、以下段々運びを附け引立て「松島や」と改めて出してゆるめ「雄島の」と元へ戻し、クリは引立てゝさらりと、サシは運んで、クセは重くならぬ樣に「悔しさよ」とゆるめ「抑善知鳥」と別に改めて出し、上端は朗かに段々と位を進め「親は空にて」より乘つて確かりと「鵲か」と乘を外してたつぷりと「婆婆にては」より調子を改めてすかりと出で、返しより乘りよく段々と運び、氣の拔けぬ樣に留を納む、總じて此樣の切は能く乘り過ぎる時は、踊り節になりたがるものなり、能く注意して謠ふべし。

能の異式（小書）

△**外之濱風**　切の「善知鳥はかへつて鷹となり」以下左の文句に變る、形も變る所多し。

理や我ながら　理や我ながら。身より出だす執心の責。心にきすと云ふも。理や人にこえて。作りし罪を懺悔にあらはす。亡者の。姿はあるかなきかにかげろふ月に。明け行く空は外の濱風波の音。うつつに消えて覺むる夢の。うつつに消えて覺むる夢の。面影ば。消え消えとなりにけり跡消え消えとなりにけり

語釋

外の濱　―　青森縣津輕海邊の總稱。

立山禪定　―　立山は富山縣越中國中新川郡に在り。禪定は山に登りて行を修むることをいふ。富士、立山、白山に限りて禪定と稱ふ。

まのあたりなる地獄の有樣　―　今昔物語第十四卷に、「越中國立山といふ處に、昔より地獄ありといひ傳へたり。（中略）昔より傳へて曰く、日本國の人罪を造りて、多く此立山の地獄に墮つといへり」云々とあり。今の地獄谷なり。

惡趣　―　惡道に同じ。趣は境遇の意なり。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六界を六道とも六趣ともいふ。此の中の地獄、餓鬼、畜生の三趣を三惡趣と名づく。こゝに惡趣とは此三惡趣を指すなるべし。名義集に、「此云三惡趣一、有三三惡趣一、亦名三三塗一、地獄名二火塗道一、餓鬼名二刀塗道一、畜生名二血塗道一」とあり。

四手の田長　―　古今集第十九卷、雜體歌に載す藤原敏行の歌、「いくばくの田をつくればか時鳥しでの田長を朝な〳〵よぶ」とあり。歌意は、幾何の田を作るのであればか、時鳥はあの如く忙はしさうに、賤の田長を毎朝呼ぶことぞとの意なるべし。しでは死出のことなるべく十王經に作つてある故、死出田長の意に取りなして詠みしものか、或は賤田長といふのが轉じたるものかもしれず。

陸奥の外の濱なる呼子鳥云々　―　夫木集に入れる定家の歌なりと傳はるれど夫木集に見當らず。善知鳥はうとうどりとも、亦うとうやすかたとも呼ばれ、種々の傳說を有する鳥なれば、殺生傳說の好材料となり曲にせられしものなるべし。

紅蓮大紅蓮　―　八寒地獄の一。

焦熱大焦熱　―　炎熱地獄の名。

衆罪如霜露　―　普賢觀經の文、「一切業障海、皆從二忘想一生、若欲二懺悔一者、端座念二實相一、衆罪如二霜露一、慧日能消除」とありて、罪業深重の徒輩も懺悔の法を修して、眞如實相を念ずれば能く其の罪を消除することを得ること、恰も日光の能く霜露を消滅するが如くなるに譬へていふなり。

籠が島　―　陸前國鹽釜浦の沖にある名所。

和田　―　神戸市の南端兵庫にあり。

箕面　―　大阪府豐能郡箕面村。箕面の瀧あり。

松島や雄島の苫屋云々　―　新古今集第十卷羇旅歌に載す、皇太后太夫俊成の歌、「立ちかへりまたも來て見ん松島やをじまの苫屋波に荒らすな」とあり。歌意は、松島の雄島の景色は實に捨て難きものである。されば一度歸りても亦直ぐに見に來たくなる故に、今日宿りたる苫屋は此まゝにして置けよとの意。

往事渺茫として　―　白氏文集第十七卷律詩五に載す、「十年

三月三十日別二微之於灃上一十四年三月十一日夜遇二微之於峽中一停二舟夷陵一三宿而別言不レ盡者以レ詩終レ之因賦二七言十七韻一以贈且欲レ記二所レ遇之地與二相見之時一爲二他年會張本一也」と詞書して、「(前略)生涯共寄滄江上、鄉國具抛白日邊、往事渺茫都似レ夢、舊遊零落半歸レ泉、醉悲灑レ淚春盃裏、(下略)」とあり。即ち白樂天の友元稹に灃水にて別れて後、五年經て夷陵といふ所にて遇ひて、三宿語り明して別れし時の詩句なり。

遲々たる春の日 ― 白氏文集第四卷諷諭四に載す、「驪宮高美二天子重レ惜二人之財力一也」の句に、「高々驪山上有レ宮、朱樓紫殿三四重、遲々兮春日、玉甃暖兮溫泉溢、嫋々兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅、(下略)」とあり。即ち驪宮高の段文にて、句意は驪山宮を賞めんとて斯く作りしなり。

秋の夜長し ― 白氏文集第三卷諷諭三に載す、「上陽白髮人愁二怨曠一也」の句「(前略)妬令潛配二上陽宮一、一生遂向二空房一宿、秋夜長、夜長無レ寢天不レ明、耿々殘燈背レ壁影、蕭々闇雨打レ窗聲」とあり。即ち上陽白髮人の段文なり。句意は思に沈みて秋の夜長を明しかねたる心をいふ。

鹿を逐ふ獵師は山を見ず ― 淮南子に載す句、「逐レ鹿者不レ顧レ兎、又逐レ獸者目不レ見二太山一、嗜欲有レ外、則明所レ蔽」とあり。又虛堂錄に、「逐レ鹿者不レ見レ山、攫レ金者不レ見レ人」とあるを引用す。

末の松山 ― 後拾遺集に載す、清原元輔の歌に、「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは」とあり。

沖の石 ― 千載集に載す、讃岐の歌に、「我が袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなし」とあり。

千賀の鹽竈 ― 風雅集第四條に載す歌に、「身をこがす契ばかりはいたづらに思はぬ中のちかのしほがま」とあり。

平砂に子を産みて落雁の ― 瀟湘八景の平沙落雁をいふ。

隱笠隱蓑 ― 拾遺集に載す、平公誠の歌に、「かくれみの隱笠をもえてしがなきたりと人に知られざるべく」とあり。

紅葉の橋 ― 玄旨抄に、「紅葉の橋は鵲の羽をならべて、七夕をわたし侍る。之をより羽の橋ともいへり。曉の別をかなしむ泪に此羽紅に染みたるを烏鵲紅葉の橋といへり」とあり。

鐵の嘴 ― 往生要集に、「爾時便有二鐵嘴大鳥一、上二彼頭上一、或上二其體一、探二啄眼睛一、而噉二食之一」とあるによる。

交野 ― 河內國北河內郡、枚方町附近。

問狂言

所の者。

(しょのもの)誰にて渡り候ぞ(いやいやし)さん候。これは思ひも寄らぬ事仰せらるゝものかな。その獵師は去年の秋の頃みまかりたるが。罪も深からうずると推量致す。それを如何にといふに。それに付きこの外の濱に。善知鳥と申す鳥の候が。砂を堀つて巢を掛けし時。濱風烈しくて巢を吹き埋め申せば。いづくの程にあるをも知らず親鳥が。うとう〳〵と呼ばはれば下よりも子がやすかたと鳴くを知るべに。餌をかけしを今の獵師はその眞似をして。鳥の子までも殺生致せば。一入罪も深くあるべきと存ずる間。あれに見えたる獵師の屋へ御出でありて。その由申しあれかしと存ずる。

装束附（善知鳥）		
ワキ	僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 緞子腰帯　扇　数珠
前シテ	獵師ノ霊	面、笑尉又ハ朝倉尉　尉髪 襟淺黄　着附無地熨斗目 茶水衣　緞子腰帯　尉扇
子方	千代童（満ナシ）	襟赤　着附縫箔　兒袴　扇
ツレ女	獵師ノ妻	面、深井　鬘　鬘帯　襟淺黄 着附摺箔　無紅唐織着流
後シテ	獵師ノ霊	面、痩男又ハ河津　黒頭　鉢巻 襟淺黄　着附無地熨斗目　白縷水衣 白無地腰帯　羽蓑　善知鳥扇　杖
小道具		男笠

素謡座席順　ワシツ　キテレ

ワキ僧詞スラリ

「善知鳥

「これは諸國一見の僧にてゐわれ未だ陸奥外の濱を見ずゐ程にこの度思ひ立ち外の濱一見と志してゐ。よき序にて候程に立山禪定申さばやとゐ存じゐ。急ぎゐ程に。これはや立山に着きてゐ。心靜かに

見せばやと思ひ（確カリ）（カル上、ヨロク拍子合ス）さてもわれ
この立山に来て見れば。目のあたり
なる地獄の有様。見ても恐れぬ
人の心は。鬼神よりなほ恐ろしや。
山路に分つ巷の數。多くは惡趣の
嶮路ぞと。涙も更にとゞめ得ぬ。
（心持シ中拍子合ヘ）慙愧の心時過ぎて。山下にこそは。

シテ尉詞（ノヘメニ確カリ）
呼掛「なうなうあれなる御僧に申すべき事の（ワキサケテ）候（ゴト）にてゐぞ」
シテ（ハカニ）「陸奥（ノク）へ
御下（クダ）りゐは言傳（コトツテ）申しゐべ〜。外の
濱にては獵師（レウシ）にてゐ者の。去年（ゾ）の
秋身（ミ）まかりてゐ。その妻（ツマ）や子の宿（ヤド）を
御尋（タヅ）ねゐひて。それにゐ簑笠（ミノカサ）手向（ムケ）

下りけれ山下にこそは下りけれ（閑ノル心）

てくれよと仰せへ「これは思ひも
よらぬ事を承りしものかな。届け
申すべき事は易き程の御事にて
さりながら。上の空に申してはやはか
ぬ承引しべき「げに確かなるしるし
なくてはかひあるまじ。や。思ひ出で
たり在りし世の今はの時までこの

同上、

柏子三合

尉が。木曾の麻衣の袖を解きて
これをしるしにと。涙を添へて旅衣。
元へ戻シ
涙を添へて旅衣。立ち別れ行くその
跡は。雲や煙の立山の。木の芽も萌ゆ
る遥ぐと客僧は奥へ下れば。亡者は
泣く泣く見送りて行く方知らずな
りにけり行く方知らずなりにけり中入

ツレ母上「げにやもとよりも定めなき世の習ひぞと。思ひながらも夢の世のあだに契りし恩愛の。別れの跡の忘れ形見。それさへ深き悲しみの。母が思ひを如何にせん」

ワキ詞「いかにこの屋の内へ案内申しはん」

ツレ「誰にて渡りはぞ」

ワキ「これは諸國一見の僧にてはが。立山禪定申しは處に。その樣すさまじき老人のありしが。陸奥へ下らば言傳すべし。外の濱にては獵師にては者の。去年の秋身まかりてはそのの妻子の宿を尋ねてそれには養笠手向けてくれよと仰せは程に。上の空に申してはやはかぼ承引は

べきと申してゐへば。その時召されたる
麻衣の袖を解きてたまはりてゐ
程にこれまで持ちて参りてゐ。もし
思し召し合はする事のゐか「これは
夢かや淺ましや。での田長の亡
き人の。上衾きあへぬ涙かな。さり詞
ながらあまりに心もとなき御事な

○小謡　上歌同　拍子二合　○

れば。いざや形見を衰代衣。冠遠に
織れる藤袴「頃も久しき形見
ながら「今取り出だし「よく見れば
疑ひも。夏立つ山の薄衣。夏立つ
山の薄衣。重なれども合はすれば。
そでありけるぞあらなつかしの形見
やがてそのまま吊ひの。序法を重ね

数々の。中に亡者の望むなる。簑笠をこそ。手向けれ簑笠をこそ手向けれ。

ワキ 中間カニ別ニ出シ

「南無幽霊出離生死頓證菩提

後シテ獵師 中 拍子三合ズ

一声

「陸奥の外の濱なる。呼子鳥。鳴く

なる聲は。うとうやすかた。一見辛都婆永離三惡道。この文の如くば。たとひ拜し申したりとも。永く三惡

道をば遁るべし。如何にいはんやこの身のため。造立供養に預からんをや。たとひ紅蓮大紅蓮なりとも。名號智火には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも。法水には勝たじ。さりながらこの身は重き罪科の。心はいつかやすかたの。鳥獸を殺し

甲 カヽテ 同 中 拍子三合

衆罪

如霜露恵日の日に照らし給へ御僧

上歌同

○小謡

○所は陸奥の。所は陸奥の。奥に海

ある松原の。下枝に交る汐蘆の。束

引きしをる浦里の籬が島の苫

屋形。園ふとすれどまばらにて。月

のためには外の濱。心ありける。住居

かな心ありける住居かな。〔あれは

ともいはぐ形や消えなんと。親子手に

手を取り組みて。泣くばかりなる。有

様かな〔あはれやげに古はさしも契

りし妻や子も。今はうとうの音に泣

きてやすかたの島の安からずや。何

しに殺しけん。わが子のいとほしき

如くにこそ。鳥獣も思ふらめと。千代

○小謡

童が髪をかき撫でて。あらなつかし
やといはんとすれば。（同上）○横障の。雲の隔て
か悲しやな。雲の隔てか悲しやな。今
まで見えし姫小松の。はかなやいづ
くに。ぞ隠れ笠ぞ津の國の。和田の
笠松や箕面の瀧つ波もわが袖に。
立つや辛都婆のそとは誰蓑笠

ぞ隔てなりけるや。松島や。雄島の
苫屋内ゆかしわれは外の濱千鳥。
音に立てく泣くより外の事ぞなき。
クリ地上「往事渺茫として夢に似た
り。舊遊零落して半ば泉に帰す
シテサシ上「とても渡世を營まば。士農工商の
家にも生まれず　又は琴碁書畫

○サシ曲獨吟
○切迫囃子

をたゝなむ身ともならず　シテ上「たゞ
明けても暮れても殺生を營み
同　遲々たる春の日も所作足らねば
時を失ひ。秋の夜長〜夜長けれ
ども。漁火白うして眠る事なし
シテ　中「九夏の天も。暑を忘れ　同　玄冬の朝
も寒からず　切　鹿を逐ふ獵師は。山を

見ずといふ事あり。身の苦〜さも
悲〜さも。忘れ草の追鳥高縄を
さゝ引く汐の。末の松山風荒れて。袖
に波越す沖の石。又は干潟とて。海
越〜なりし里までも。千賀の塩竈
身を焦がす。報いをも忘れける事業
をなゝ悔〜さよ。そもそも善知鳥。

やすかたのとりどりに。品寥りたる
殺生の「中」に無慙やなこの鳥の。
愚かなるかな波嶺の。木々の梢
にも羽を敷き波の浮巣をもかけ
よかし。平砂に子を生みて落雁の。
はかなや親は隱すとぞ。すれどうとう
と呼ばれてゑはやすかたと答へけ

りさてぞとられやすかた
親は空にて血の涙を。親は空にて
血の涙を。降らせば濡れじと菅蓑
や。笠を傾けてかゝこの。便りを求め
て隱れ笠。隱れ蓑にもあらざれば。な
ほ降りかゝる。血の涙に。因もくれなゐに
染み渡るは。紅葉の橋の。かさゝぎか

○獨吟
○仕舞

同上ノラズ○婆婆にてはは善知鳥やすかたと見え
て。善知鳥やすかたと見えて
も。冥途にしてはは。化鳥となり罪人
を追つ立て鐵の。嘴を鳴らし。羽を
たゝき銅の爪を。磨ぎ立てゝは。眼
をつかんで肉むらをさけばんとす
れども猛火の煙にむせんで聲を。

あげ得ぬは鴛鴦を殺し〻科やら
ん。遁げんとすれど。立ち得ぬは。羽
拔鳥の報いか。うとうは。却つて鷹と
なり、われは雉とぞなりたりける。
遁れ交野の狩場の吹雪に空も
恐ろし地を走る。大鷹に責められ
て。あら心うとうやすかた。安き隙

動けくたべや御僧

なき身の苦しみを。助けてたべや。御僧助けてたべや。御僧といふかと思へば失せにけり。

小塩

觀世流 竹氏信作

曲柄　四番目（略三番目）
季節　三月
稽古順　四級
所　山城國乙訓郡大原野村

梗概

下京の人々（ワキ、ワキツレ）うち連れて大原野の花見に出で立ちけるに、貴賤群集の中に、花の枝をかざしてさも花やかなる老人（シテ）の立ち交れるを見て、いづくより來り給ふぞと問へば、姿こそ山のかせきに似たりとも、心は花になさばなるべきをと答へ、在原業平がこの所に供奉して、后の御事を思ひ出で、「大原や小塩の山も今こそは、神代のことも思ひ出づらめ」と詠めりし故事など語りてうち興ぜしが、夕日のかげろふ頃、影の如くに消え失せぬ。（中入）

花見の人々、奇特の思ひをなして、なほも花の蔭に待ち過せば、在原業平（後シテ）現れ出で、「今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし、消えずはありと花を見ましや」などと樣々歌を詠じて、花に興じ昔をしのびて、舞を舞ひけるが、山風吹き亂れて花を散らせば、今見しは夢か現か、業平の姿は消えて、春の夜の月は曙の花に殘りけり。

謡ひ方

業平物にて、雲林院に似たる曲にて、それよりは輕し、されど前は老翁なれば、輕く謡ふには非ず、全體に引締めて優美に品よく謡ふなり。

△**シテ**　一聲の出は、餘り抑へず、閑かに伸びりと出で、サシは稍さらりと運びを附け、上歌は伸々と長閑に「思ひよらずや」と受けて閑かに「姿こそ」と柔吟にてさらりめに「何と語らん」と落着いて、ワキとの掛合は段々と運び「霞か」より互に詰め「事新らしき」と受けて確かりと「申すにつけて」と閑かに、ロンギは長閑に「貴賤の花見」と朗かに伸んびりと謡ふ。

△**後シテ**　年若き業平なれば品よく閑かに、花やかに謡ひ出し、以下ワキとの掛合は優美に、滯らぬ樣に「花も今」とたつぶりと地へ渡し、サシは長閑に、上端は引立てゝ「昔かな」と改めて閑かに寛たりと「昔かな」のワカは花やかに「花も忘れじ」「心や小塩の」と乘つて、閑かにうつきりと謡ふ。

△**ワキ**　花見の素袍男なれば、位を附けずにさらりと次第を謡ひ、名乗もさらりと、サシは朗かに、上歌は長閑に、シテとの掛合はさらりと「九重の」とたつぷりと地へ渡し「かゝる面白き」とすらりと「不思議や今の老人の」と確かりと、待謡は花やかに謡ふ、素謡にてはワキツレを略す。

△**地**　「をかしとこそは」とさらりめに「よしや」より引立てゝ「都邊は」と氣の抜けぬ樣にさらりと引立てゝ出だし「けにや大原や」より稍氣を變へ長閑に「名殘小塩の」と稍淋し味を附けしめやかに、ロンギは氣を變へ、引立てゝさらりと「輿車の」とたつぷりと「天も花にや」とうつきりと、中入前を閑めて、後の「今日こそは」と美しく晴れやかに出で「待たうよ」とゆるめ、クリは引立てゝ花やかに、サシは閑かに運びを附け、クセは閑かに優美に三番目の時は「香にめでしなり」と打切をゆるめ、上端は引立てゝうつきりと「有し御幸を」と乘つて、以下シテとの掛合は優美に晴れやかに謡ひ、留をとくと閑む。

語　釋

花にうつろふ嶺の雲　―　花の色に映じ合ふ小塩山の雲をいふ。卽ち雲のかゝるを心のかゝるにいひかけたり。

下京　―　京都を三つに區分して、二條より北を上京、二條と四條の間を中京、四條より南を下京といふ。

大原野　―　山城國乙訓郡にあり、大原野神社あり。

花も都の　―　桓武天皇の御時、この大原野にあたる長岡に都し給ひしことあり、故に處からといふ。

木綿花　―　木綿といふ織物をもて作れる花をいふ。木綿は神に手向くるものなれば、手向につゞけて花の如く美しき意にて、花をば袖につゞけたるなり。

手向の袖　―　神に手向けに行く袖、卽ち參詣人の意。

神もまじはる　―　和光同塵といひて、神は塵世に交りて人間を救ひ給ふことをいふ。

しをりして　―　しをりとは木の枝などを立てゝ、再び來る時迷はざらん爲に、花の本へ行く道の目印とするを云ふ。

年ふれば齡は老いぬ云々　―　古今集第一卷、春歌上に載す、前太政大臣藤原良房の歌、詞書に「染殿の后のおまへに、花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる」として、「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」とあり。歌意は、年數が經てば意外に自分の齡は老いぬれば、これが如何にも悲しい。然し斯く立派な花を見れば悲しい所か、何等の心配もないとの意。

光りにあたる　―　古今集第一卷春歌上に載す、文屋康秀の歌詞書に「二條の后の東宮のみやすん所と聞えける時、正月三日御前に召して仰言ある間に、日は照りながら、雪の頭に降りかゝりけるを詠ませ給ひける」として、「春の日の光りにあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき」とあり。歌意は、春の日光にあへば雪は消失する、然るに今は春の日にあたりながら斯樣に頭が白くなつて、年老いることが痛はしいとの意を、眼前の光景に自分の述懷を詠み入れたるなり。

情の道　―　人情をいふ。卽ち歌など詠みて花を賞することなり。

老な厭ひそ　―　老人なりとて厭ふなかれ、花の心よとの意。

姿こそ云々　―　夫木集に載す歌に、「姿こそ山のかせきに似たりとも心は花になさばならめや」とあり。かせきは鹿をいふ、稼ぎにかけたるなり。

朽ちは果てしなや　―　朽ち果てじを、果てもなき心にかけて云ふ。

色も香も知る人ぞ知る　―　古今集第一卷、春歌の上に載す、紀友則の歌「君ならでたれにか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」とあり。歌意は、此梅の花は君の外に誰に見せようぞ、見せる人もない。それは梅花特有のよい色香をも辨へる人がよく知つて、見分けも聞分けもするからであるとの意で、知る人ぞ知ると云ふは知らぬならば問ひ給ふなにかけて云ひしなり。

里は軒端の　―　里は遠く立ちのきたるにかけていふ。

あかねさす　―　日の枕詞。

八重九重の　―　雲霞の重なるを九重の都にかけて云ふ。

都邊はなべて錦となりにけり云々　―　古歌なるべし。

大原や小塩の山も今日こそは　―　古今集第十七卷、雜歌上に載す、在原業平の歌、「大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ」とあり。歌意は、斯樣に御子孫の藤原氏の御息所が、東宮の御母儀として御參詣あるなれば、此大原野の小塩山に御鎭座あらせられる氏の御神も、彼神代に天照太神から天孫を輔佐すべき勅諚を承つた昔の御事も、何時はともあれ今日こそは思し召されて、御滿足に思はれるであらうとの意。此歌伊勢物語にも出づ。

昔男　―　伊勢物語に業平の事を「昔男ありけり」と書き出せるによりて云ふ。

しばふるひと　―　皺古人の意、老人をいふ。又柴に皺をかけたるなり。源氏物語の榊及明石兩卷に見えたり。

輿車　―　輿や車をいふ。

ながえ　―　車の前に出でたる處、これを長枝の意にかけてかざしつれと續けたり。

天も花にや醉へるらん　―　朗詠集に載す、三月三日、「春之暮月、月之三朝、天醉レ干レ花、桃李盛也」とあるを引く。

かげらふ　―　影になりて消ゆる事。

和光の影 ― 神の光を世に交ふる事。光の字につきて影といひ、影になりて消えし意を業平にかけたり。

衆生濟度 ― 人間を救濟するために神となりて現はれしをいふ。

月やあらぬ春や昔の云々 ― 古今集第十五卷、戀歌五に載す、在原業平の歌、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」とあり。歌意は、月も昔の月、春も昔の春わが身も昔のわが身なるに、去年あひたる人に再び逢はれぬといふ意。

花見車のやごとなき ― 車の心と輪との間を支へたる木を「や」といふ。

春宵一刻價千金云々 ― 蘇東坡の詩に、「春宵一刻價千金、花有二清香一月有レ陰」とあり。

けふ來ずばあすは雪とぞ云々 ― 古今集第一卷、春歌上に載す、在原業平の歌、「今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずばありとも花と見ましや」とあり。歌意は、今日わが來らざりしなば、雪と散つて仕舞ひしならん。明日まで消えずには居ても、花とは見らるまじきにといふ意。此歌伊勢物語にも出づ。

花見車くるゝより ― 車とくゝると音を重ねてあやとす。

月の花よ ― 月夜の花、卽ち月前の花に同じ意。

おもふ事いはで云々 ― 新勅撰集第十七卷、雜歌二に載す、在原業平の歌に、「思ふことといはでたゞにぞ止みぬべき我にひとしき人としなければ」とあるを引く。

思ひ内より ― 内心にある思ひの外に洩れたるをいふ。

春日野の若紫のすり衣云々 ― 新古今集第十一卷、戀歌一に載す、在原業平の歌、「春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知られず」とあり。歌意は、若紫は紫といふ草の若葉なるをいふ。すり衣は其若紫の汁を摺りつけて模樣とせる衣。しのぶにつゞけたるは、陸奥の信夫郡より出づる摺衣を名產とすれば忍びあまりて亂るゝ心にいひかけたり。

みちのくのしのぶもぢずり云々 ― 古今集第十四卷、戀歌四に載す、河原左大臣源融の歌、「陸奥の忍ぶもぢずり誰ゆゑに亂れんと思ふ我ならなくに」とあり。歌意は、摺りかたの入り亂れたるを心の亂るゝに云ひかく。誰の爲にかく思ひ亂るべき我にはあらず、君故なればこそとの意。

唐衣きつゝ馴れにし妻しあれば云々 ― 古今集第九卷、羇旅歌に載す、在原業平の歌、「唐衣きつゝ馴れにし妻しあればはるゞゝ來ぬる旅をしぞ思ふ」とあり。歌意は、京都には馴れたる妻を殘して來ぬれば遠路の心細さを思ふといふ意。此歌伊勢物語に出づ。

はてしなの ― 東國のはてなきと、心のはてなきとを兼ねていふ。

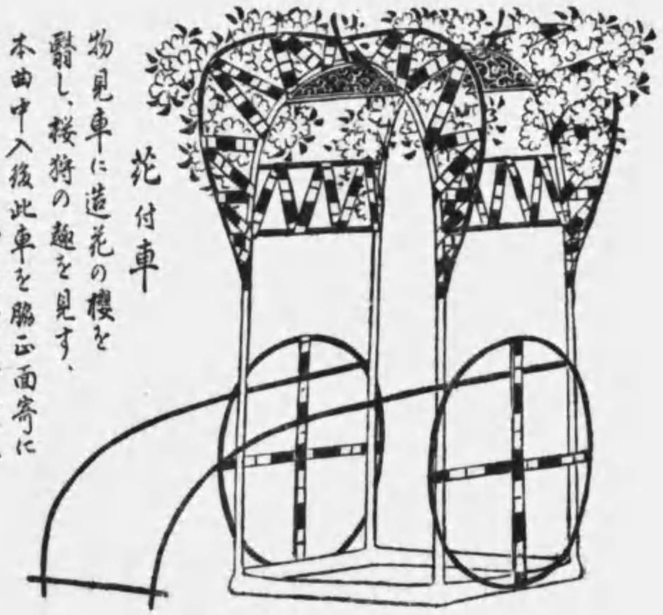
武藏野は今日は云々 ― 伊勢物語に載す歌、「武藏野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」とあり。これ伊勢物語に業平のつれゆきたる女の詠める歌なり。歌意は、武藏野には夫も我も籠りて居れば、今日は野守も燒き給ふなとの意。此歌古今集第一卷、春歌上に載す初句に「春日野は」とあり。

夢かうつゝか云々 ― 伊勢物語に載す歌に、「君や來しわれや行きけん思ほえず夢かうつゝか寢てか覺めてか」とあり。また「かきくらす心の暗にまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ」とあり。前句は女、後句は業平の詠みし歌なり。此句をとりつゞけたるなり。

間狂言

所の者大原野神社の由緒を語る。

是は此あたりの者にて候。今日はもの淋しき折からなれば。大原の櫻を見て心を慰めばやと存ずる。いや是なる人々はいづくよりの花見にて候ぞ（此間せりふ常の通り）まづ當社と申し奉るは。和州春日明神にて御座候。それを如何にと云ふに。大宮人の内にてもとり分き藤原氏の御方は。是より南都までは路次遠くて。再再御參詣も叶ひ難きにより。閑院の左大臣冬嗣の卿の嘉祥三年に。春日を此御山へ御移しなされ。則ち氏の御祖の神と崇め奉り。毎年に御神事と號して嚴重に執り行はれし故。その頃二條の后の未春宮の御息所と申す時分。當社へ行啓なされたると申し習はす。故にこの后の御參詣遊ばされし折ふし。供奉の衆は歷々にて御座候ぞ。在原の業平も御伴なされたる由承る。その刻供奉の人々に后より。種々の引出物を下されし時。在中將には。別して御衣を參らせられたれば。その時分業平の歌に。大原や小塩の山も今日こそは。神代の事も思ひ出づらめと。かやうに詠み給ひたる心は。小塩の神も今日の御社參を嬉しくや見るらんとある歌の心なる由申す。又下心は末の后に立たせ給はん時。よりより色々心を巡らして。斯くの如くに詠み給ひたるとも承る。さあるによつて在原の業平を。この小塩の明神に齋ひ籠め給ふ由。一說には申し傳はる。又春日は四所の明神にて御座す故。當社の謂れ樣々あるとは申せど。神秘なればあからさまには申されず。まづ我等の存じたるは斯の如くにて候（ソウロウ）。是は奇特なる事仰せらるゝものかな。方々の是まで花見に御出である事を。當社明神御納受なされ。山賤（やまがつ）と現じ御言葉を交はされたると存ずる間。暫く是に御逗留あり。重ねて奇特を御覽あれかしと存ずる。



花付車

物見車に造花の櫻を翳し、桜狩の趣を見す、本曲中入後此車を脇正面寄に出すことあり、他には吉近に用ふ

装束附（小塩）		
ワキ	花見ノ男	着附段熨斗目　素袍上下 小刀　扇
ワキツレ	同二人	着附無地熨斗目　素袍上下 小刀　扇
前シテ	尉	面、朝倉尉　尉髪　襟淺黄 着附無地熨斗目　茶水衣　緞子腰帯 尉扇
後シテ	在原業平	面、中將　初冠　懸纓　襟淺黄又ハ赤 着附赤地縫箔　込大口　差貫 單狩衣　縫腰帯　融扇
作物		櫻持杖　花付車

小塩

素謡座席順　ワキテ

ワキ男上　ワキツレ二人　次オツヨク　拍子ニ合

花にうつろふ嶺の雲花にうつろふ嶺の雲かるや心なるらん

ワキ詞

かやうには者は。下京邊に住居する者にてはさても大原野の花。今を盛りなる由承り及びは同。若き人々を伴ひ申し。唯今大原山へと急ぎは

サシ上ル　拍子三合ハス

面白やいづくはあれど所から。花も都の名にしあふ。大原山の花櫻

三人上歌　拍子三合

今を盛りと木綿花の。今を盛りと木綿花の。木綿花の。手向の袖も一入に。色そへ春の時を得て。神もまづはる塵の世の。花や心にまかすらん花やこころにまかすらん

シテ尉上　一セイ　拍子三合ハス

しをりして。花をかざしの袖ながら。老木の紫と。人や見ん　幸上　幸ふれば齡は老いぬしかはあれど。花をし見ればもの思ひもなしと詠みしも身の上に。今白雪を戴くまで光にあたる春の日の。のどけき御代の時なれや　幸切　上歌　散りもせず。咲きも殘らぬ

○小謡

花盛り。咲きも残らぬ花盛り。
四方の氣色も一入に。匂ひ満ち色
にそへ。情の道に誘はる。老な厭ひ
そ。花心。老な厭ひそ花心。「不思議や
な貴賤群集のその中に。殊に辛た
けたる老人。花の枝をかざし。さも花
やかに見え給へは。そもいづくより来

り給へぞ。「思ひよらずや貴賤の中
に。わきて言葉をかけ給へは。さも
心なき。山賤の。身にも應ぜぬ花
好きぞと。お笑ひあるか人々よ。姿
こそ。山のかせきに似たりとも。心
は花にならばこそ。なさばならめ
や心からに。をかしとこそは覧ず

らめ。よしやこの身は埋れ木の朽ちは。果てしなや心の色も香も知る人ぞ知らずな問はせ給ひそ

ワキ詞「あら面白のたはむれやなよも眞には腹立て給はじ。いかさま故ある心言葉の。奥ゆかしきを語り給へ」

シテ「何と語らん花盛り。いにしへ及ばぬけしきをば。いかゞは思ひ給ふらん」

ワキカル上来「げにげに妙なる梢の色。うつろふ影も大原や」

シテ詞「小塩の山の小松が原よりの。煙る霞の遠山櫻」

ワキカル上来「里は軒端の家櫻」

シテ「匂ふや窓の梅も咲き」

ワキ「あかねさす日も紅の霞か」

シテ「八重」

ワキ「雲か」

シテ「九重の」

上歌同

拍子合

○都

ワキカル上来

○小謡

邊はなべて錦となりにけりなべて錦となりにけり。梅を折らぬ人しなき。花衣著にけりな。時も日も月も彌生。あひにあひ眺めかなげにやゝ大原やゝ小塩の山もけふこそは神代も思ひ知られけれ。

（ワキ詞）かゝる

面白き人に会りあひてゐものかな。このまゝ御供申し。花をも眺めうずるにてゐ。又唯今の言葉の末に。

（中ノリ）大原やゝ小塩の山もけふこそは（詞）神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白うゐ。これは如何なる人の

（柏子三合ハズ）

（地）詠歌にてゐぞ（シテ）事あたらしき

問事かなこの大原野の行幸に在原の業平供奉し給ひし時。忝くも后の御事を思ひ出でて神代の事とは詠みしとなり中すにつけてわれながら空恐ろしや天地の神の御代より人の身の妹背の道は淺からぬ

上歌同

柏子三合

○名殘小塩の

名殘小塩の山深み

元暦

山深み名殘小塩の山深みのぼりて

元久

の世の物語。語るも昔男あはれ舊

元久

りぬる身の程歎きても。かひなかり

閑ル心

けり歎きても。かひぞなかりける

赤切

ロンギ地上

かひもなかりける

げに山賤のさしもげにぞばふる

人と見ゆるにも。心ありける姿か

シテ上

な心知られればとても身の姿に

恥ぢぬ花の友に馴れてさらばまじらん　甲　地上「まづれやまづれ老人の。心若木の花の枝　シテ中間カニ「老隱るやとかざさん

地上「かざしの袖を引き引かれ。このもかのもの蔭ごとに　シテ「貴賤

の花見　地　引立テ伸ケト「輿車の。花のながえをかざしつれてよろぼひさぞらひとりどりにめぐる盃の。天も花にや醉へるらん紅うづむ夕霞。かげろふ人の面影ありと見えつ失せにけり　中入間

ワキ詞「確カニ不思議や今の老人のたゞ人ならず見えつるが。さては小塩の神代の古跡。和光の影に業平の花に

映じて衆生濟度の。姿現し給へ
ぞと　キリ三人上歌　寛タリ　待謠　拍子三合
「思ひの露もたまさかの。
思ひの露もたまさかの。光を見る
も花心。妙なる法の道のべに。なほ
も奇特を待ち居たりなほも奇
特を待ち居たり
後シテ業平上　一セイ　拍子三合ハズ
「月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。わ

が身ぞもとの。身も知らじ　ウキ　サワリ　ロ上　「不思
議やな今までは。立つとも知らぬ
花見車の。やどとなき人の御宿
樣。これは如何なる事やらん
「げにや及ばぬ雲の上。花の姿はよ
も知らじ。ありし神代の物語。姿
現すばかりなり　詞確カニ　「あらありがたの

○小謡

御事や。他生の縁は朽ちもせで

シテ「契りし人も様々に」「思ひぞ出づる

シテ「花も今」上歌同「来ずはあすは雪

とぞ降りなまし。あすは雪とぞ

降りなまし。消えずはありと。花と

見まやと詠ぜしに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人の樹。

かざしの袖ふれて花見車。くるくる

より月の。花より待たうよ。拍子合八六「それ

春宵一刻値千金。花に清香月に

陰。惜しまるべきはたゞこの時なり

シテサシ上

○サシ曲獨吟

○切迫囃子

「思ふ事いはでたゞにや止みぬべき

同

われにひとしきひとしなければとは

思へども人知れぬ。心の色はおのづ

○仕舞

三番目ノ時ハめでしなりかわり

から恩ひ内より言の葉の露しな
じなに洩れけるぞや○春日野の。
若紫のすり衣。しのゞの乱れ。限り
知らずもと詠ぜしに。陸奥の忍
ぶもぢずり誰ゆゑ乱れんと思ふ。
われならなくにと。詠みしも紫
の色に深み香にめでしなり。又

シテ上

は唐衣。着つゝ馴れにし妻しあれ
ば。遥ゞ来ぬる。旅をしぞ思ふ心
の奥までは。いさ白雲のくだり
月の都なれや東山。たれもまた
あづまのはてなの人の心や
むさし野は。けふはな焼きそ若
草の妻もこもれりわれもまた

こもる心は大原や。小塩につづく通ひ路の。行方は同じ戀草の。忘れめや今も名は昔男ぞと人もいふ。

シテ

○獨吟 太鼓声合 拍子三合ハズ

昔かな 序之舞

○ワカ上

昔かな。花も所も。月も春

○仕舞

地上

ありし事を

○シテ

花も忘れじ

地上

花も忘れぬ

○シテ

心や小塩の山風

吹き乱れ散らせや散らせ。散り

迷ふ木のもとながら。まどろめば。桜に結べる夢か現か。世人定めよ。夢か現か世人定めよ。めてか。春の夜の月。曙の花にや。残るらん。

著作權所有
無斷複製

昭和八年十二月十日納本
昭和八年十二月十五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世左近
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行兼印刷者　檜常之助
東京市神田區錦町六丁目十番地
振替東京三五五二番、電話神田二五二六番

發行所　檜書店
京都市二條通麩屋町東北角
振替大阪三六二八番、電話上二一九〇番

京都　檜木興書

落